

耶穌降生千八百八十四年米國聖書會

舊約
聖書
撒母耳前書

明治十七年

日本橫濱印行

02-KI

海老澤文

どホエルカナナりくなせしりバベインナありてどく之をなやま
 す是故にハンナないてものかはざりきハ其夫エルカナのいひ
 けるハハンナは何故にやくや何故あものくりざるや何故に心あ
 りしむや我ハ汝のためあり十人の子よりもまさるにあらずや
 りてレロにて食飲せしものちハンナたちあがきり時に祭司エリ
 エホバの宮の柱の傍にある壇に坐をナハンナ心あくるしエホ
 バのいりて甚く哭き誓をなしていひけるハ萬軍のエホバよ若
 し誠お嬢の惱をあらへり我を憐れみ嬢を忘れずして嬢ハ男をわ
 たへたまハ我これを一生のあいだエホバあさよげ剃髪刀を其
 首にあつまじハハンナエホバのまへあ長くいのりけれバエリ其
 口お目をどめたりハハンナ心の中あものいへバ只唇うごくのミ
 みて聲きこえず是故エリみきを酔たる者と思ひ昔之にいひけ
 るハ何時まで酔ひをるか爾の酒をさきよハハンナこたへていひ

けるハ主よ然るおあらず我ハ氣のわづらふ婦人おして葡萄酒を
 も濃き酒をものます惟わが心をエホバのまへお明せるあり
 を邪ある女とあすあかれ我ハわが髪と悲みの多きよりして今ま
 であられたりエリ答へていひたるハ安んじて去れ願くハイスラ
 エルの神汝の求むる願ひを祈したまへんことをハハンナいひけ
 るハねがわくハ仕女の汝のまへに思をえんことをと斯てこの婦さ
 りて食ひ其顔ふたよび哀しげあらざりき是は旅て彼等朝はや
 くあきてエホバのまへに拜をしりへりてママの家おいたる而し
 てエルカナ其つとハンナとまじりるエホバ之をあらへりたまふ
 ハハンナ孕みてはち月もちて男子をうみ我て色をエホバに求め
 し故ありとて其名をサムエル(エホバに聽る)とあづく三愛に其人
 エルカナ及び其家族みな上りて年々の祭物及び其摺ひし物をさ
 まく三然ともハンナのしらす其夫あひひけるハ我ハみれ子の

乳を舐れするに及びてのち之をたづさへゆきエホバはまへにあらはしめ恒わうしこに居らしめん其夫エルカナのいひける汝の善と思ふところを爲し此子を乳ばるすやでとせむるべし只エホバの其言を確實ならしめ賜ふことをねがふと斯くこれ婦止まりて其子に乳をのませ其ちばるれするを立ちし言乳ばるせしとき牛三頭粉壹斗酒壹甕を取り其子をたづさへて乳あるエホバの家おいたる其子なほ幼稚し是をおがて牛をよろしの子をエリの肘に携へゆきぬハンナいひける主よ汝はたましひは活くわきあつてあふてあんなちの傍わたちエホバにいたりし婦ありまわれ此子のためあいのりしにエホバわが求めしもこれをあたへたまへり此故おわれまたこをエホバあささげん其一生のあひだ之をエホバあささぐ斯てかしむてエホバををがめり

ハンナ編りて言ける我心のエホバによりて喜び我角はエホバによりて高し我口の足敵の上おはりひらく是は我汝の救拯によりて樂ひが故ありエホバのごとく聖き者あらず其は汝の外に有る者あけきばあり又足れらの神のごとき誓はあるふとあし汝等重ねて甚く誇りて語るあかれ汝等の口より慢言を出せあかきエホバは全知の神おして行爲を裁度りたまふり勇士の弓は折き倒るよ者の勢力を帯ふ飽足る者の食のために身を備へせ偶たる者は憩へり石女は七人を生み多くの子を有る者の貧ふるにいたるハエホバは貧からあめ又富しめたまひ卑しまた上らしめたまふエホバは貧からあめ又富しめたまひ卑くしまた高くあたまふハ在弱者を座の中より擧げ窮乏者を埃の中より升せて王公の中お坐せあめ榮光の位をつがあめたまふ地の杜ハエホバの所屬なりエホバ其上お世界を置きたまへり

ホハ其聖徒の星を守りたまはん惡き者は黑暗にありて黙すべし
 其の人力をもて勝つべからざればあり十エホバは悖逆者を破碎
 き天より雷を彼等の上にくだしたまひ其王の力を與へ其裔ろ
 よぎし者の角を高く立たせんとエルクナラマ往て其家あり
 たりとガ種子の祭司エリの女へありてエホバあつかふさきて
 エリの子の邪なるものおしてエホバをあらざりきま祭司の民に
 かける習慣の斯のごとし人祭物をささぐる時肉を煮るわひだお
 祭司の僕三の齒ある肉又を手おどりて來り蓋を蓋あるひの鍋
 あるひの鼎お突きいれ肉又の引きあぐるどころの肉之祭司みあ
 これを已おどる是くッホ於て凡てそこに來るイスラエル人に
 あせりま脂をやく前にも亦祭司のしもべ來り祭物をささぐる人
 かいふ祭司のためお焼くべき肉をあたへよ祭司の汝より煮たる
 肉を受けず生腥の肉をこのむとまもし其人みれむむひ直ちに

脂をやくべければ後心のこのむままに取れどいは候之わいふ
 否今あたへよ然らずバ我強て取んとま故に其壯者の罪エホバの
 まへに甚だ大ありろハ人々エホバに祭物をささぐるあどをいと
 ひたればありまサムエルおは幼して布のエホアを着てエホバの
 まへおつゝふふまた其母これためお小き明衣をつくり歳毎お
 ろの夫とともお年の祭物をささげおのぼる時ふとをもちきたる
 年ユリエルカナとろの妻を祝していひけるハ汝ガエホバおさよ
 げたる者のためおエホバ此婦よりして子を汝おわたへたせんと
 ことをぬがふと斯てかれら其郷にかへる三去りしてエホバハン
 ナをかへりみたまひければハンナ孕みて三人の男子と二人の女
 子をうめり童子サムエルはエホバのまへにありて生育てり三ふ
 こエリ甚だ老て其子等がイスラエルの人々にあせし語の事を
 聞きまた其集會の幕屋の門わいづる婦人たちと寝たるを聞て三

みれにいひけるは何ぞ斯る事をなすや我このすべての民より汝
 らのあしき行をきく言ひて汝子よ然すべからず是がきくどろの
 風聞よからず爾らエホバの民をしてあやまたしむ人もし人あ
 ひひて罪ををかさば神之をさばらんさきど人もしエホバあひ
 りれども其子父のこをば誰かこきがためおどりあしをささんやど
 んと思ひたまへばあり童子サムエル生れおきてエホバ人ど
 に愛せらるるをば神の人エリの許ふ来りこれおひけるはエホ
 バ斯くいひたまふ爾の父祖の家エロブトおいてバロの家あ
 りしとき我明かおのこあわらはれ志あわらずや我これをイストラ
 エルの諸の支派のうちより選みて是が祭司とあし是が壇の上お
 祭物をさよげ香をたけめ我前おエホバを衣志めまたイストラエ
 ルの人の火祭を悉く汝の父の家あわたへたりあらんずわが命せ

し犠牲と種物を汝の家にてふみつくるや何ぞ我よりもあんなの
 子をたふとみわが氏イストラエルの諸の祭物の最もあきとを
 もて己を肥すや是のへおイストラエルの神エホバいひたまはく
 我誠お曾ていへり汝の家あよびあんなの父祖の家永くわがまへ
 おあゆまんと然ども今エホバいひたまふ決めてあうらず我をた
 ふとむ者の我もてをたふとむ我を服しむる者のかろんせらる
 べしと祝よ時いたらん我汝の腕と汝の父祖の家の腕を絶ち汝の
 家お老たるもの無らまめん我大いおイストラエルを善すべけれ
 ば汝の家内お異見えん汝の家にこのうち永く老るものあか
 るべしまたたわが壇より絶ざる汝の旗の者の汝の目をろみなひ
 汝の心をいたまめん又汝の家あうまれいづるもの壯年に志
 て死なん言汝のふたりの子ホフニとヒチハスの遇どろの事を
 其微とせよ即ち二人どもお同じ日に死るん我わがためお忠

信ある祭司をおみさん其人は心どわが意にきたがひておこるはん思れるの家をかたうせんかれわが膏うまぎし者のまへに恒にわゆむべし去かして汝の家にのゐれる者の皆きたりてこれお屈み一厘の金と一片のパンを乞ひ且いりんねがはくり我を祭司の職の一任じて些少のパンにても食ふことをえせしめよと

一童子サムエルエリのまへにありてエホバおつかふ當時のニホバの言されにして默示あること恒あざりきニ神の靈あはき漸くくもりて見るゑをえず此時其室に寝たりニ神の靈あはきえずサムエル神の權あるエホバの宮に寝ね時おエホバサムエルをよびたまふ彼我まゝありといひてエリの前に趨ゆきいひたる汝われをよぶ我まゝにありエリいひける我よばす反りて臥よと乃はち起きていぬニエホバ交たかさねてサムエルよびたまへばサムエルおきてエリのもどにいたりいひける汝

われをよぶ我まゝにありエリてたへける我よばすわが子よ反りていねよサムエルいまだエホバを去らずまたエホバのみとバいまだかれあらのとすハエホバ三たびお又サムエルをよびたまへばサムエルおきてエリの前ふいたりいひける汝われをよぶ我まゝにありとエリ乃ちエホバの童子をよびたまひしをささるニ故にエリサムエルにいひけるゆきて寝ねよ彼若し汝をよむ僕聴くニエホバ語りたまへといへどサムエルゆきて其室にいねしおニエホバ來りて立ちまへの如くサムエルサムエルとよびたまへばサムエル僕さく語りたまへといふニエホバサムエルにいひ賜けると視よ我イスラエルのうちおの事をあさんてれをさくもの皆其耳ふたつるがら鳴ん其日おのわれ嘗てエリの家あつて言しことを始より終までことごとくエリにあすべしわれかつてエリお其惡事のためお永くろの家をさばらん

と云めせりその子の福よきとをなすを去りて之をどかめさ
 ばあり是故にわきエリのいへお誓ひてエリは家は惡の犠牲
 なるひの禮物をもて永くあがらふ能はずといへりまサムエル朝
 までいねてエホバの家は戸を開きしは其異象をエリお云めすこ
 とをおろす其エリサムエルをよびていひけるの旦那子サムエルよ
 答へけるの旦那れまゝありてエリいひける何事を汝おつげた
 まひしや請ふ我あうくそありき汝もし其汝お告げたまひしどあ
 ろを一つてもあうくすどきの神汝に聞くるし又かさねてあうくるし
 たまへサムエル其事をことごとく云めして彼お隠すことある
 りきエリいひける是はエホバなり其よしと見たまふことをあ
 したまへとサムエルろだちぬエホバこそよもいましてろ
 のことをして一も地おあきらめたまふダンよりベエル
 シバいたるまでイスラエルは人みるサムエルがエホバは預言

者どさだまれるをしれりニエホバふたまひて戦のんどしエバ
 まふエホバは口をあいてエホバの言およりてサムエルおのれ
 を云めしたまふありサムエルは言おまねくイスラエル人あまよ
 ぶ

第四章

一 イスラエル人ベリシテ人いであひて戦のんどしエバ
 チセルの邊お陣をどりベリシテ人のアベクお陣をどるニベリレ
 テ人イスラエル人にむかひて陣列をなせり戦ふおあよびてイス
 ラエル人ベリシテ人のまへおやぶるベリシテ人戰場にいて其
 軍四千人をくりをふるせりニ民陣營いたるおイスラエルは長
 老日けるのエホバ何故に今日我等をベリシテ人たまへおやぶり
 たまひしやエホバの契約は權をシロより此おたづさへ來らん其
 權われらのうちお來らば我らを敵は手よりすくひいだすみどあ
 らんど口あくて民人をシロにつらとしてケルビムの上お坐した

又ふ萬軍のエホバの契約の櫃を其處よりたづさへきたらしむ時
 にエリの二人の子ホフニとビチハス神の契約のはふとよもに彼
 處にありきエホバの契約の櫃陣營にいたりしときイストラエル
 人皆天によばりさけびけれバ地ありひとけりハベリレテ人
 呼の聲を聞いていひけるハベル人の陣營お起れる此大あるさけ
 びの聲何予やと遂にエホバの櫃の其陣營おいたれるを知るセ
 ベリレテ人おろさていひけるハ神陣營おいたる又いひけるハ
 呼われら祿あるかある今にいたるまで斯ることおかりきハあ
 等祿あるかな誰く且れらを是ら強き神の手よりすくいいださ
 んや此等の神ハ昔し語の災を以てモコト人を曠野に擧し者
 りハベリレテ人よ強くあり豪傑のごとく爲せハブル人ガかつて
 汝らお事しごとく汝らこまに事ふるありれ豪傑のごとく爲して
 戦へよナクくてベリレテ人戦ひしハイストラエル人ヤふれて各

其天幕に逃るへる戦死はあんだ多くイストラエルは歩兵の仆れし
 者三萬人ありき又神の櫃ハ奪はれエリの二人の子ホフニとビ
 チハス殺さるは是日ハベニヤミンの一人軍中より走きたり其衣を
 褰き土をうむりてシロにいたるは其いたれる時エリ道の傍ハ壇に
 坐して觀望居たり其心に神の櫃のこを思ひ煩らひたきバあり
 其人いたり邑あて人々お告げきバ邑こりてさけびたり昔エリ
 此呼號の聲をきよていひけるハ是喧嘩の聲何あるやと其人い
 ろききたりてエリにつぐは時にエリ九十八歳にして其目かたま
 りて見るこおたえず其人エリおいひけるハ我ハ軍中より來
 ざるもの我今日軍中より逃れたりエリおいひけるハ吾子よ事いか
 んぞ使人答へていひけるハイストラエル人ベリレテ人の前お逃げ
 且氏の中お大なる戦死ありまた汝の二人の子ホフニとビチハス
 ハ殺され神ハ攫り奪ひたりは神の櫃のこを演しときエリ其

瘡より仰けふ門の傍ふおち頭をれて死ねり是は爾老て身重かりければあり其イストラエルを聘し四十年ありきたエリの媳ヒチバスの妻孕みて子産ん時ちるよりしが神の匪の奪れしと男と夫の死ふしとの傳言を聞えかバ其痛みありきたり身をりめて子を産めり其死ふんとする時傍わたる婦人ふきおいひける懼るよなれ汝男子を生りと然ども答へず又ありミサニ只榮光イストラエルをさりぬといひて其子をイカボア榮あしと名く是は神の匪奪れしよりまた男と夫の故因るあり三またいひけるは榮光イストラエルをさりぬ神の匪うばこれたれをる

一ペリシテ人神の匪をどりて之をエベチセルよりアレドにもちきたるニ即ちペリシテ人神の匪をどりて之をダゴンの家おもちきたりダゴンの傍に置ぬエアレドハ次の日夙く起き

エホバの匪のまへダゴンの俯伏お地おたふれをるをみ乃はちダゴンをどりて再びふきを本の處におく口また翌朝夙く興きエホバの匪のまへおダゴン俯伏お地にたふきををるを見るダゴンの頭と其兩手門闕のうへに断ち切れをり只ダゴンの體のみのこれり是をもてダゴンの祭司およびダゴンは家おいるもの今日にいたるまでアレドバにあるダゴンの鬮をふますおくてエホバの手おもくアレド、人おくはよりエホバふれをはるばし腫物をもてアレド、および其四周の人をくるしめたまふアレド、人らの斯るを見ていひけるはイストラエルの神の匪を我らのうちおどむべりらず其手いたくわれらおよび我らの神ダゴンおくはこれありは是故お人をつうはしてペリシテ人の諸君主を集めていひけるはイストラエルの神の鬮をいかおすべきや彼らいひけるはイストラエルの神のはこのガタお移さんと遂にイストラエル

の神のはみをうつそれ之をうつせるべし神の手其邑あくとよりて
 滅亡るもの甚だおぼし即ち老たると幼とをいはす邑の人をうち
 たまひて屠物人々あみざり十是あいて神のはみをエタロン
 あくくりたるお神の匿エタロンあいたりしときエタロン人さけ
 びていひける我どわが民をふるさんどてイスラエルの神のは
 こを我おうつすとかくて人を遣ひしてペリシテ人の諸君主を
 あつめていひけるイスラエルの神の匿をおくりて木のどふる
 わかへさん然らば我ど足が民をふるそふどあからん蓋の邑中
 恐ろしき滅亡あふり神の手甚だあもく其處にくはさればあり
 死ふるざる者の屠物にくるしめらさ邑の號呼天お達せり

第六章 一 エホバの匿七月のあいだペリシテ人の國ありニペリ
 シテ人祭司と卜筮師をよびていひける我らエホバの櫃をい
 とせんや如何おして之をもとの所あへすべきの我らあつたよニ

答へけるイスラエルの神の櫃をへすときいふれを空しくあ
 へするうれ必らず彼お過祭をなすべし然るさば汝ら愈ことをえ
 且彼の手の汝らをとなれざる故を知にいたらん口人々いひける
 の如何ある過祭をりれあふそべきや答へける之ペリシテ人の諸
 君主の數あまたぐひて五の金の屠物と五の金の鼠をつくれ是の
 汝ら皆と汝らの諸伯あよべる災い一あるあよるニ汝らの屠物
 の像あよび地をあらず鼠の像をつくりイスラエルの神お榮光を
 版そべし庶幾は其手を汝等あよび汝等の神と汝等の地あくるふ
 るみどを軽くせんニ汝らあんテエロプト人とバロの其心を頑
 せしごとくおのれの心をかたくあおするや祠あれらの中に獻度
 其力を止めせしめ彼ら民をゆるしめ民つひあさりしおあらず
 やとされば今あたらしき車一輛を切くり乳牛のいまだ草をつけ
 ざるもの二頭をとり其牛を車に繋ぎ其轡をこゑして家につまゆ

きハエホバの櫃をどりて之を其車くるまに載せ汝らきみらが過祭あはれまつりとして彼に
 ます金の製作物を櫃びつをさめて其傍かたわらにおき之をおくりて去らし
 めニ志こころかして見よ若し其境まはりのみちよりベテシメシのほらばこ
 の大なる災わざはひを我らにさせるものハ彼かあり若し志こころかせずハ我儕われらを
 うちしハ彼の手ておあらずしてろのみとの偶然たまたまあり去いを志こころるべ
 しハ人々ひとびとつひお斯かふし二つの乳牛ちぎしをどりて之を車くるまにつまぎろの
 櫃びつを室むろおどちてめニエホバの櫃びつおよび金の鼠ねずみと其塵物ちりものの像がらを
 さめたる櫃びつを車くるまに載のすニ牝牛めづし直ただおあゆみてベテシメシの路みちをゆ
 き鳴なつニ大踏おほいをすよみゆきて右左みぎひだりおまがらずベテシメシ人の君主み
 ベテシメシの境まはりまで其うしろおまたがひゆけりま時ときハベテシメ
 シ人谷ひとやに麥あわを刈り居たりしま目をあげて其櫃びつをみ之を見みるをよ
 るまみべりま車くるまベテシメシ人ヨシユアの田いりにまいりて其處ところにどまま
 る此こハ大おほいある石いしあり人々ひとびと車くるまの木きを劈きり其牝牛めづしを燔祭ほねまつりとしてエホ

ハおさよげたりまレビの人エホバの櫃びつとこれまもある積たかの金
 の製作物つくろひものををさめたる者ものをどりおろし之を其大石おほいのうへにおく
 志こころおしてベテシメシ人此日このひエホバに燔祭ほねまつりをまへま犠牲けがれものをさよげ
 たりま其ベテシメシ人の五人の君主みみみを見て同ひと日ひハエタロンハ
 へれりま志こころしてベテシメシ人まが過祭あはれまつりとしてエホバにませし金の腰こし
 物ものハみれあり即すなはちアセドバのためハ一ガザのためハ一ありま一アセクハ
 シのためハ一ガザのためハ一エタロンのためハ一ありま一ありま一ありま一ありま
 金の鼠ねずみの城邑しろと郷里きりをいはす凡みなて五人の君主みに属ぞくするベテシメシ
 人ハ邑むらの數かずおまたがひて造つくれりエホバの櫃びつをまろせし大石おほい今日けふ
 小こいたるまでベテシメシ人ヨシユアの田いりハありまベテシメシの人
 々ひとエホバの櫃びつをうまひしおよりエホバこれまをうちたまふ即すなはち
 民たみの中なか七十人しちじゅうにんをうてりエホバ民たみをうちて大おほいみれをまろまたまひ
 しまかま民たみをささけべりまベテシメシ人まいひけるハ譚ことばかみの聖よきき神かみ

あるエホバのまへに立つふどをわんエホバ我らをはあれて何人の
 のところあのばりもきたまふべきや三かくて使者をキリアテヤ
 リムの人遣はしていひけるハペリシテ人エホバの櫃をかへし
 たれば汝らくだりて之を汝らの所お携へればるべし

第七章

一キリアテヤリムの人來りエホバのはみを携のばりこれ
 を山のうへあるアヒナダブの家おもちきたり其子エレアザルを
 聖てエホバの櫃をまもら志むニ其櫃キリアテヤリムにとまる
 こと久しくして二十年をへたりイストラエルの全家エホバを
 ひて歎けり三時にサムエルイストラエルの全家お告ていひけるハ
 汝らもし一心を以てエホバおかへり異る神とアレタロテを汝ら
 の中より棄て汝らの心をエホバお定め之のみ事へあばエホバ
 汝らをペリシテ人の手より救ひいださん口ふよにおいてイストラ
 エルの人々バアルとアレタロテをそてよエホバおの事ふニサ

ムエルいひけるハイストラエル人をみどくミズバにあつめよ
 我汝らのためエホバにいのらんハあれちミズバお集まり水を
 汲て之をエホバのまへお注ぎ其日斷食して彼處にいひけるハ我
 等エホバに罪ををしたりとサムエルニズバお於てイストラエルの
 人を鞠くセペリシテ人イストラエルの人々のミズバに集れるを
 聞あををペリシテ人の諸君主イストラエルおせめのばれりイストラ
 エル人あをを聞いてペリシテ人をあうられたりハイストラエルの人々
 サムエルにいひけるハ我らのために我らの神エホバに祈るふど
 をやむるあうれ然らばエホバ我らをペリシテ人の手よりそくひ
 いださんニサムエル哺乳羊をとり燔祭とあしてこれをまつたく
 エホバにさまぐまたサムエルイストラエルのためにエホバにいの
 りけれをエホバみれにこたへたまふニサムエル燔祭をさまげ居
 し時ペリシテ人イストラエル人と戦はんとて近づき日は日エホバ

大ある雷をくだしハリシテ人をうちて之を亂し賜けれバハリシテ
 人イスラエル人のまへに取れたりナイスラエル人ミズバをいで
 ンハリシテ人をあひ之をうちてベテカルの下にいたるサムエ
 ル一の石をどりてミズバとセンの間におきエホバは是まで我らを
 助けたまへりといひて其名をエベテセル(助けの石)と呼ぶニハリ
 シテ人攻伏られて再びイスラエルの境にいらササムエルは一生
 けあひだエホバの手ハリシテ人をふせけりナハリシテ人のイス
 ラエルより取たる邑々のエクロンよりガタマでイスラエルにあ
 へりぬまた其周圍の地のイスラエル人ふれをハリシテ人け手よ
 りどりうへせりまたイスラエル人どアモリ人ど好をむそべりナ
 サムエル一生のあひだイスラエルをささき蘇々ベテルとギルガ
 ルおよびミズバをめぐりて其處々にてイスラエル人をささきま
 たラマにかへれり此處に其家あり此にてイスラエルをささき又

此にてエホバに壇をきづけり

サムエル年老て其子をイスラエルの士師とあすニ兄の

名をヨエルといひ弟の名をアヒヤといふベエルレバにありて士

師たりニ其子父の道をあゆまサして利にむりひ賄賂をとりて審

判を曲ぐニ是にたいてイスラエルの長老とあつたりてラマに

ゆきサムエルの計に至りてこれにいひけるハ視よ汝は老い汝

の子は汝の道をあゆまサされバわきらに王をたてよわれらを

かしめ他の國々のごとくあらしめよトハろの我らハ王をあたへ

て我らを轡くしめよといふを聞てサムエルよろふバサ面してサ

ムエルエホバあいのりしりむエホバサムエルあひたさひける

ハ民のそべて汝にいふところのこゝをを聴け其は汝を棄るにあら

サ我を棄て我をして其王とならさらしめんとそるありハうきら

ハバガエロントより救ひいだせし日より今日あいたるまで我を

すてよ他の神につらへて種々の所行をなせしごとく汝おもまた
 然す^ホ然^ホどもいまだ其言をきけ但し深くいさめて其治むべき王の
 常例^ホを止めすべし^ホサムエル王を求むる民にエホバのみど心を
 ことごとく告げていひける汝等をささむる王の常例^ホの斯のごと
 し汝らの男子をとり己の^ホのために之をたてし車^ホの御者^ホとあし
 兵とあしまた其車の前驅^ホとあさんまた之を^ホのれの爲に千夫^ホ
 長^ホ五十夫長とあしまた其地をたがへし其作物を刈ら止めまた武
 器と車器とを造ら止めんまた汝らの女子をとりて製香^ホ者とな
 し厨婦^ホとあし爰趨者^ホとあさん又汝らの田取^ホと葡萄酒^ホと橄欖園^ホ
 の最も善きとあろを取て其臣僕にわたへまた汝らの穀物^ホと汝らの
 葡萄酒^ホの什分一^ホをとりて其官吏^ホと臣僕^ホにわたへまた汝らの
 および汝らの最も善き牛^ホと汝らの驢馬^ホを取てあの色^ホのために作
 るあめを又汝らの羊の十分一^ホをとり又汝らを其僕とあさん其

日において汝等己のために擗^ホし王のごとによりて呼號らんさ
 れどエホバ其日に汝らに聽たまひざるべしと然に民サムエルの
 言に忠たがふみどをせずしていひける否われらに王なかるべ
 くらず我らも他の國々の如くにあり我らの王われらを聽きわ
 れらを率て我らの戰にたよるこん^ホサムエル民のみど心を盡く
 きよて之をエホバの耳に告ぐ^ホ三エホバサムエルにいひたまひけ
 るのあきらのごと心を聽きり^ホれらのためお王をたてよサムエル
 イストラエルの人々にいひける汝らあ^ホ其色^ホあ^ホへるべし
 一^ホ 茲にベニヤミンの人あて^ホキレと名くる^ホ方の大なるものあ
 りキレのアヒエルの子アヒエルのセロンの子セロンのベコラタ
 の子ベコラタのアヒヤの子アヒヤのベニヤミンの子あり^ホキレ
 にサウロと名くる子あり^ホ壯おして美はしイストラエルの子孫の中
 お彼より美はしき者あ^ホく肩より上民のいづきの人よりも高し^ホ三

サウルの父キレの驢馬失ぬキレ其子サウルにいひけるハ一人の
 僕をどもあひ起ちて仰き驢馬を尋ねよハサウルコエフライムの山
 地を通り過ぎセヤリセヤの地を通りすゞきども見あたらすセヤ
 リムの地を通りそゞきども居らすベニヤミンの地をどほりすゞ
 れども見あたらすユウレラツの地にいたれる時サウル其ども
 なへる僕あひひけるハいぎ還らん恐らくハわガ父驢馬の事を指
 て我等の事を思ひ願ハんハ僕こそあひひけるハ此邑ハ神の人あ
 り尊き人にして其言よどろハ皆必らず成る我らうしてあいた
 らんかき我らガゆくべき路をわれらおあめすことあらんセサウ
 ル僕あひひけるハ我らもし也かバ何を其人におくらんか器のハ
 ンハ既ハ器て神の人あふくるべき禮物あらす何かあるヤハ僕空
 たサウルおふたへていひけるハ誠よ我ガ手ハ銀一セケルの四分
 の一あり我こそを神の人あたへてわれらハ路をえめさしめんと

ハ昔シイスラエルおたいてハ人神おどハんでゆくときハいざ
 先見者おゆかんどいへリ其ハ今の預言者ハ昔シハ先見者どよを
 れたればありハサウル僕あひひけるハ善くいへりいざゆかんど
 て神の人のをる邑におもひけりさかきら邑おいる坂をのぼれる
 時童女数人の水くみおいづるにおひ之おいひたるハ先見者ハ此
 におをるや答ていひけるハをる視よ汝のまへおをる急ぎゆけ今日
 民崇仰て祭をあすにより彼けふ邑おきたれりま汝ら邑おいる
 時かきガ崇仰にのぼりて食お就くまへに直ちおかれにおハん其
 ハ彼まづ祭品を獻してあかるのち招かきたる者食ふべきに因り
 めれガ来るまでハ民食ハざるあり故ハ汝らればれ今おれにおハ
 んとさかきら邑おのぼりて邑おありに在るとき視よサムエル崇
 仰にのぼらんとておれらおひりひて出きたりぬまエホバサウル
 のきたる一日まへにサムエルの耳につけていひたまひけるハま

明日いまだおろ我ニヤエンの地より一箇の人を汝にけりさん
 汝のさお膏を注ぎてわが民イスラエルの長どるせりれは民を
 ベリレテ人の手より救ひいださん民はさけび我を違せしお
 より我あまををかへりみるなりをサムエルサウルを見るときエ
 ホハあまをいひたまひけるに祝よはダ爾ふつけしは此人あり是
 人ダ民ををさむべし我サウル門の中にサムエルおちかづ
 きいひけるに先見者の家にいづくおあるや請ふ我おつけよ未サ
 ムエルサウルにみたへていひけるに我のするのち先見者あり爾
 わがまへおきて崇邱のぼれ爾ら今日我とよみに食す可し明
 日われ汝をさらしめ汝の心おあるまを悉く汝お詰めさん三
 日まへお失たる汝の驢馬の既お見おたりたををとおもふありれ
 抑もイスラエルの總ての責の誰の者あるや即ち汝と汝の父の
 家のもものあらすやニサウルふたへていひけるに我のイスラエ

ルの支派の最もりき支派あるベニヤエンの人にしてわが族のベ
 ニヤエンの支派の族の最も小き者に非やあん予期るとを我
 にくたるやニサムエルサウルと其僕をみちびきて堂にいり招
 れたる三十人をわりの者の中の最も上に坐せしむサムエル
 人にいひけるにわが汝おわたして汝の計おおけといひし分をも
 ちきたを言應人肩と肩に罷る者をとりあげて之をサウルのまへ
 に置くサムエルいひけるに祝よ是の存へおきたる物なり汝のま
 へにおきて食へ其の是れ民をまねきし時よりてを汝の爲おた
 く之へおきたればありりてサウル此日サムエルとよもふ食せ
 り崇邱をくだりて邑にいりし時サムエルサウルとよもに屋背
 の上おてもものぐたる云かれら早くおく即ちサムエル暗ふ屋背
 上おるサウルをよびていひたるに起よはれ汝をへさんどサ
 ウルするはちおきあがるサウルとサムエルともは外にいで三邑

の極處はたにゆくべきときサムエルサムエルがサウルサウルにひけるは僕わが命いのちじて
我等われらの先にゆくしめよ(僕先にゆく)と云うして汝きみ暫しばらくくとまわれ我われ汝きみ
に神かみの言ことばを忘れさん

一サムエルサムエルするにち膏あぶらの瓶びんをとりてサウルサウルは頭に沃ふき口
接つしてひけるにエホバエホバ汝きみをたてよ其産業しごくの長ちやうとあしたまふお
あらずやニ汝きみ今日けふ我われをはるれて去いりゆく時ときニヤミンヤミンは境さかいれせ
ルザルザにあるツケルツケルの墓はらのあたりにあて二人ふたりのひとにあふべしけれ
ら汝きみふいに汝きみがたづねにゆきし驢馬ろばを見みあたりぬ汝きみは父驢ちちろば
馬うまのこをすてよ汝きみられみどをおもひわづらひわが子このみどを
いかとそべきやといへりとニ其處そのところより汝きみ尙なほそよみてダボルの標しるし
の樹きれどふろにいたらんに彼處あそこあてベタルベタルにたばり神かみあまうで
んどする三人さんにんの者もの汝きみにあはん一人ひとりの三頭さんづつの山羊やまがひ羔かを携たづへ一人ひとり
三頭さんづつのパンパンをたづさへ一人ひとりの一壺ひとつの酒さけをたづさふらるるに汝きみに

安否やすやすをどひ二頭ふたづつのパンパンを汝きみにあたへん汝きみ之これを其手そのてよりうくべし
ニ其の後のち汝きみ神かみはギベアギベアにいたらん其處そのところわベリセタベリセタ人ひとは代官たいていあり
汝きみ其處そのところにゆきて邑むらあいるとき一郡ひとむらの預言者よめいは惡わると讖しるしと笛ふえと琴こたを
前に執とらせて預言よめいあつと崇邱たかねをくだるにあはんニ其の時そのとき神かみの
みたま汝きみにのぞきて汝きみられらどもに預言よめいし變ありて新あらたしき人ひとと
ならんニ是こゝらの微あや汝きみの身みにおみちを手のあたるにまかせて事こと
を爲なそべし神かみ汝きみどもにいませむありハ汝きみ我われにさきだちてギ
ルガルルガルあくだるべし我われ汝きみの前にくだりて燔祭ほにを供ともへ酬恩祭むねを獻けん
げんわが汝きみのまどお至いたり汝きみの爲ためをべきことを示しすまで汝きみ七日ななひの
あひだ待まちつべしニサウルサウル背せをうへしてサムエルサムエルを離はなせし時とき神かみ之これ
に新あらたしき心こゝろをあたへたまふと云うして此こゝ去いるし替か其日そのひにおみれり
ナふたり彼處あそこにゆきてギベアギベアあいたれるときみよ一郡ひとむらの預言者よめい
みれにあふと云うして神かみの靈たまサウルサウルのぞみてサウルサウルくきらに中ちゆう

にありて預言せり。素よりサウルを語る人々サウルの預言者ども
 儲に預言するを見て互ひあいひけるにキレの子サウル今何事
 にあふやサウルも預言者の中にあるや。其處の人ひどり答へ
 て彼等の父は誰や。といふ是故にサウルも預言者の中にあるや
 といふに。隠さるれり。サウル預言を終て崇邱ふいたる。お言サウル
 の叔父ヤケルと僕ふいひたるに。汝ら何處にゆきしや。サウルいひ
 けるに。驢馬を尋ねに出し。何處にもをらざるを見て。サムエルの
 許にいたれり。サウルの叔父いひけるは。サムエルの汝は何をい
 ひしか。請ふ我につげよ。サウル叔父にいひたるに。明くお驢馬は
 見あたりしを告げたり。と然ども。サムエルが言るに。國王の事とみれ
 ぬ。おつげさ。り。サムエル民をニズバ。ひて。エホバの交へお集め。ま
 イストラエルの子孫ふいひたるは。イストラエルの神エホバ。斯くいひた
 る。お我。イストラエルをみちびきて。エロブトより出し。汝らをエロブ

ト人の手および。凡て汝らを虐める。國人の手より救ひいだせり。ま
 然るに。汝らおのれを悲難と。難苦れ。うちより救ひいだしたる。汝ら
 の神を棄て。且否。互れらに王をたてよ。といへり。是故に。いま汝等の
 支派と。耶お。また。が。ひて。エホバのまへに出よ。サムエルイストラエ
 ルは。許の支派を呼よせし時。ベニヤミンの支派。籤にあたりぬ。ま
 た。ベニヤミンの支派を其。籤のうすお。また。が。ひて。呼よせしとき。マ
 テリの。旗。籤にあたり。キレの子。サウル。籤にあたり。人々。これを。尋
 ねし。う。ども。見。出。され。ば。三。また。エホバ。お。其人。と。此。に。來。る。や。否。や。を
 問し。お。エホバ。答。たま。こ。く。成。よ。彼。の。行李。の。お。ひ。だ。に。く。る。と。人
 々。は。せ。ゆ。き。て。彼。を。其。處。より。つ。れ。きた。れ。り。彼。民。の。中。に。た。つ。お。肩。よ
 り。以上。民。の。何。の。人。より。も。高。り。き。言。サムエル。民。に。い。ひ。ける。は。汝
 ら。エホバ。の。擢。きた。ま。ひ。し。人。を。見。る。う。民。の。うち。お。是。人。は。如。き。者。る
 し。民。みな。よ。ば。より。い。ひ。ける。に。願。く。は。王。の。ち。な。ぐ。れ。時。お。サムエ

ル王國の典章を民ふまめして之を習に志るし之をエホバのまへ
 ふ齋めたりまかしてサムエル民をふどく其家にゐへらまひ
 三六 サウルもまたギベアの家をかへるに神の心を感ぜられたる勇
 士等ふれどももにゆなり 然ども邪ある人々の彼人いりて我
 らを救えんやといひて之を藐視り之に禮物をおくらざりまかど
 サウルの嘆のこどくせり

一 アンモニナハレギレアデのヤベシにのぼりて之を聞
 びヤベシの人々ナハレにいひたるの我らと約をふせ然らバ汝ハ
 つかへんニアンモニナハレに答へけるの我かくして汝ら
 二 約をふさん即ち我汝らの右の目を抉りてイスラエルの全地に
 恥辱をあたへんニヤベシは長老これいひたるの我らに七日の
 猶豫をあたへて彼をイスラエルの四方の境におくることを得さ
 三 ちめよ而して若し我らを救ふ者あくバ我ら汝にくだらん 斯て

使サウルのギベアにいたり此事を民の耳に告まかせ民皆聲をあ
 げて哭ぬニ愛にサウル田より牛に志たぐひて来るサウルいひけ
 るは民何ふよりて哭くやど人々これハヤベシ人の事を告ぐハサ
 ウル之を聞るとき神の靈これハ臨みてろの怒甚だしく燃えたち
 七一 軌の午をころしてふれを切り割き使れ手をもてふれをイス
 ラエルの四方の境にあまねくおくりていとしめたるの誰にても
 サウルとサムエルふまたぐひて出ざる者之其牛かくのごどくせ
 らるべしと民エホバを畏み一人のおどく均くいであたりハサウル
 八 ベセクあてふれを敷ふるにイスラエルは子孫三十萬ニダの人三
 九 萬ありき 斯て人々來ざる使にいひけるニギレアデのヤベシ
 十 人にかくいへ明日日熱き時汝ら助を得んと使うへりてヤベシ
 十一 人に告げよとバ吾よるふ次ぬニ是をもてヤベシの人いひけるハ
 十二 明日汝らに降らん汝らの善と思ふとみろを爲せ 明日サウル民

を三隊にわかれ曉更に敵の軍中にいりて日の熱くある時まで
 アンモニ人をころすべしを遣はる者の皆ちりてふありて二人
 俱ふあるものありき民サムエルにいひたるはサウル豈我ら
 の王となるべけんやと言し誰ぞや其人を引き來れ我ら之をふ
 るさんまサウルいひたるは今日エホバ救をイスラエルに施した
 まひたれば今日の人をふるすべからず昔茲にサムエル民にいひ
 けるにいぎキルガルを往て彼處にて王國を藉にせんとま民とな
 りて爾思祭をエホバのまへに獻げサウルとイスラエルの人々
 皆うしておて大に祝へり

一サムエルイスラエルの人々にいひけるは觀よ我汝ら
 わいひし言をことごとく聽て汝らに王を立てり見よ今王汝ら
 のまへにあゆむ我の老て衰えろし祝よわが子ども汝らと我らと
 共にあ

り我幼稚時より今日おいたるまで汝等のまへにあゆめり
 我ふにありエホバはまへど其膏ろぎし者のまへに我を訴へ
 よ我誰の牛を取りしや誰の驢馬をとりしや誰を掠めしや誰を虐
 遇しや誰の手より賄賂をとりてわが目を瞞せしや有らば我これ
 汝らにうへさんば彼らにいひけるは汝ら我らをうすめずくるしめ
 ず又何をも人の手より取りしことあしサムエルはれらにいひ
 けるは汝らが我手のうちに何をあ見いださざるをエホバ汝らお
 証したまふ其膏ろぎし者も今日証す彼ら答へけるは証したま
 ふはサムエル民にいひけるはエホバのモーセとアロンをたて
 し者汝らの先祖をエロブトの地より導いだせしものなりと立ち
 あがれエホバが汝らおよび汝らの先祖あふしたまひし謀れ義し
 き行為あつきて我エホバのまへに汝らと論せんハヤコブの二
 ロットにいたるおあよびて汝らの先祖のエホバに呼はりし時エ

ホバモーとアロンを遣ひしたまひて此二人汝らの先祖をエ
 ープトより導きいだして此處おすましめたりと志かるに彼ら其
 神エホバを忘れしかむエホバこきをハッルの軍の長レセラの手
 とペリレテ人の手およびモアブ王の手に足たしたまへり斯て彼
 らこれを攻けきバキ民エホバに呼りていひけるは我らエホバ
 を棄てバアルとアセタロテに事へてエホバお罪を犯したりさき
 と今我らを敵の手より救ひいだしたまへ我ら汝あつゝへんどこ
 是においてエホバエルバアルとバラグとエフタとサムソンを遣
 へして汝らを四方の敵の手より救ひいだしたまひて汝ら安ら
 かに住めりま志かるに汝らアンモンの子孫の王ナハシの汝らを攻
 んどて来るを見て汝らの神エホバ汝らの王あるお汝ら我にいふ
 否我らををさむる王みかるべうらずとま今汝ら選えし王汝ら
 グぬグひし王を見よ視よエホバ汝らに王をたてたまへり昔汝ら

もしエホバを興て之おつりへ其言おあたぐひてエホバの命お
 ろむらずまた汝らと汝らををさむる王恒お汝らの神エホバお從
 ひし善しままある色ども汝らもしエホバの言おしたぐらずしてエ
 ホバの命おろむるバエホバの手汝らの先祖をせめしごとく汝ら
 をせむべしま汝ら今たちてエホバが爾らの目のまへおあしたま
 ふ此大なる事を見よま今日ハ麥刈時おわらずや我エホバを呼ん
 エホバ雷と雨をくだして汝らぐ王をもどめてエホバのまへお
 爲したる罪は大なるを見まらしめたまひんまうくてサムエルエ
 ホバをよびけきバエホバ其日雷と雨をくだしたまへり民をみ大
 おエホバとサムエルを恐るま民をみサムエルおいひたるは僕ら
 のためお汝の神エホバおいのりて我らを死なせらまめよ我ら誰
 の罪おまた王を求むるは悪をくひへたればありまサムエル民お
 いひたるは懼るあられ汝らこの總ての悪をゐしたりされどエホ

パお従ふふとを怠す心を何くしてエホバお事へ三虚しき物お逃
 ひゆくあるは是の虚しき物なれば汝らを助くることも救ふふと
 も得ざるあり三エホバ其大なる名のためお此民をそてたまひき
 るべし其のエホバ汝らをおのきの民とあすことを善とまたまへ
 ばあり三また我の汝らのためお祈ることをやめてエホバに罪を
 をりそことい決してせざるべし且おれ善き正しき道をもて汝らを
 をしへん言汝ら只エホバをりしむみ心をつくして誠おみれあつ
 うへよ而して如何お大なるみとをエホバ汝らおなしたまひしを
 思ふ可し三またかきとも汝らもしな得悪ををさむ汝らと汝らの王
 ともお得ろばざるべし

第二節 サウル 歳おて王の位お即き 二年イスラエ

ルををさめたり二爰にサウルイスラエル人三千を擇む其二千ハ
 サウルとともにおミクマレおよびベタルの山地にあり其一千ハヨ
 ナタンとともおベニヤミンのギベアおあり其餘の民ハサウルお
 の共蔭屋おるへらしむエコナタンケバおあるベリレテ人の
 代官ををろせりベリレテ人之れをきく是おおいてサウル國中お
 あまねくラツバを吠ていのしめたるハブル人よ聞くべしロイ
 スラエル人皆聞けるお云くサウルベリレテ人の代官を撃り去り
 してイスラエルベリレテ人の中お惡まるど斯て民めされてサウ
 ルおまたダヒギルガルおいたるエベリレテ人イスラエルと戦
 んどて集りけるダ兵車三百騎兵六千おして民の汝れ沙れ多き
 ダおどくありき彼らのぼりてベテアベンおむかへるエクマレお陣
 をおどりキイスラエル人苦められ其危きを見て哲巖穴お林叢
 お崗樹お高塔お坎阱おくられたり三また或るハブル人のヨルダ
 ンを涉りてガドとギレアデの地おいたる然るおサウルの尙ギル
 ガルおあり民皆戰慄て之おまたダふハサウルサムエルの定めし

期ふまたグひて七日どとせりしがサムエルガルに來らず
 民はゐれて散けれバエサウルいひける燔祭と酬恩祭を我も
 ちきたれど遂に燔祭をさげたり+燔祭をさぐることを終し
 どきお視よサムエルいたるサウル安否を問はんぞてこれをいで
 迎ふおサムエルいひける汝何をみせしやサウルいひける
 我民の我をのみるきてちりまた汝の定まれる日のうちお來らず
 てベリレテ人のミクマレおあつまざるを見しうバサベリレテ人
 ギルガルお下りて我をおろはんお我いまだエホバをみこめず
 といひて魁めて燔祭をさげたりサムエルサウルいひける
 汝おろろあることをみせり汝らの神エホバのあんちに命じ
 たまひし命令を守らざりしをみり若し守りしならむエホバイスラ
 エルををさむる位を永く汝おさだめたまひしをらん言然どもい
 ま汝の位だもたざるべしエホバ其心お適ふ人を求めてエホバ之

に其民は長を命じたまへり汝がエホバの命せしことを守らざる
 によるまうくてサムエルたちてギルガルよりベニヤミンのギベ
 アのばりいたるサウルおのれどもにある民をうろふるに凡
 ろ六百ありさまサウルおよび其子ヨナタン並にこれどもに
 ある民のベニヤミンのケバお居りベリレテ人のミクマレお陣を
 張るを劫掠人三隊おわられるてベリレテ人の陣よりいで一隊のオ
 フラの路にむりひてシユアルの地にいたりま一隊のベテホロン
 の道むむりひ一隊の曠野の方おあるセボイムの谷をのりむ境の
 路にむかふま時おイスラエルの地のうち何處にも銀工ありりき
 是をベリレテ人へブル人の劍あるひの槍を作るまを恐れたれ
 ばなりニイスラエル人皆其相鎗斧耒即ち相鎗三齒鎗斧の鏢に欠
 わりてこれを鍛ひ改さんとする時又の軛を尖らさんとする時
 常にベリレテ人の所にくだれり三是をもて戦の日おサウルおよ

びコナタンとともある民の手にの鎌も槍も見えず只サウルと
 其子コナタンのみ持ち抜ふベリレタ人の先陣ニクマレの渡口に
 進む

四節

其時

サウルの子コナタン武器を執る若者いひけるの
 いざ對面にあるベリレタ人の先陣に涉りゆゑんと然ぞ其父の
 告げざりきニサウルギベアは極おいてニグロンおある石榴の
 樹れ下お住まりシガ俱おある民におよる六百人ありきニ又アヒ
 ヤエボアを衣てどもおをるアヒヤのアヒトブの子アヒトブのイ
 カボアの兄弟イカボアのヒチハスの子ヒチハスのレバありて
 エホバの祭司たりしエリレ子あり民コナタンは行けるをえら
 ざりきニコナタンの涉りてベリレタ人の先陣おいたらんとする
 渡口に間お此傍お編履あり彼傍おも編履あり一の名をボゼツと
 しひ一の名をセチといふニ其一の北お向ひてニクマレお對し一

の南おむりひてケバお對すハコナタン武器を執る少者おいふ
 さ我ら此對禮るき者どもの先陣おいたらんエホバ我らのためお
 きたらきたまふおとあらん多くの人をもて救ふも少き人をもて
 ぞくふもエホバおいての妨げなしセ武器をどるもの之おいひ
 けるの總て汝の心おあるとふるをなせ進めよ我汝の心おまたダ
 ひて汝とよもおありハコナタンいひたるの見よ我らりの人々
 のどころおわたり身をうれらおあらはさんユうれら若し我らダ
 汝らおいたるまでとままれと斯く我らおいはと我らのどころお
 どとまりておきらの所おのぼらんエホバおさらを我らの手にわ
 のぼれどくいはと我らのぼらんエホバおさらを我らの手にわ
 たしたまふあり是を徴とさんと斯て二人其身をベリレタ人
 の先陣おあらはしけれバベリレタ人いひけるの祝よへブル人其
 ろくきたる穴よりいで來るとまするはち先陣の人コナタンと其

武器を執る者ふてたへて我等の所ふ上りきたるは目も物見せんと
いひまのバコナタン武器を執る者いひけるは我もまたたひて
のばれエホバ彼らをイスラエルの手ふだしたまふありまコナ
タン撃のばり其武器を執るもの之もまたたひて之をふろそ昔コ
シのまへに作る武器をどる者も後ふまたたひて之をふろそ昔コ
ナタンと其武器を取るもの手はじめお殺せし者およそ二十人此
そ田畑半段の内にあるまゝおして野にある陣のものおよび凡
ての民の中お驚おこり先陣の人および劫掠人もまたをのまき
地ふるひ動けり是の神よりの戦慄ありきまニヤエシンのギベア
にあるサウルの戌卒望見しに視よベリレテ人の群衆くづれて此
彼はちらむるを時おサウルおのれどもある民いひけるは汝
ら黒驢て誰が我らの中よりゆきまうを見よとすなわち汝らへた
るにコナタンとろの武器を執るもの居らざりきまサウルアヒ

ヤホニゴアを持きたれといふ其のかれ此時イスラエルのまへに
ニゴアを着た邑バ連まサウル祭司あつたれる時ベリレテ人の軍
の騒いよくましたりけれバサウル祭司にいふ如く汝の手を措
けとまゝおくてサウルおよびサウルと共ある民皆呼はりて戦ひ
に至ふベリレテ人おのゝ魚を以て互に相撃ちけれを共取敵は
あゝだ大ありきままた此時よりまへベリレテ人おどもおあり
てベリレテ人お共お上りて陣お來るどころのへブル人もまた歸
へりてサウルおよびコナタンと共おあるイスラエルの人に合せり
三又エフライムの山地にゐられたるイスラエルの人在ベリレテ人
の逃るを聞てまた戦ひに出るをを追撃り三是の如くエホバ此日
イスラエルをすくひたまふ而して戦ひベテアベンおうつれり言
されど此日イスラエル人苦めり其のサウル民を留めて夕まで
即ち是夕敵お仇をむくゆるまでに食物を食ふ者の呪詛きんと言

たきをなり是故に民の中に食物を味ひし者なし愛を民みみ林
 森に至る地の表に蜜あり即ち民森をいたりて蜜のあがるよを
 みる然ども民徳を興るは誰も手を口につくる者なし然もヨ
 ナタシ心其父が民をちるはせしを聞きりければ手あたる杖の末
 をのちして蜜をひたし手を口につけたり是も由て其目あきらめ
 なるりぬ時を民のひどり答て言ける汝の父のたたく民をちる
 りせて今日食物をくらふ人の呪詛のきんどり是も由て民つり
 きたりよヨナタシいひけるわが父國を頌せり請ふ我この密を
 すみしく習しよよりて如何わが目け明かにありしを見よ
 ましてや民今日敵よりうらひし物を十分お食しめらば
 人をころすこと更におほるべきにあらすやヨイスラエル人の
 の日ペリシテ人を撃てヨグマシよりアヤロンおいたる末にして
 民はるのだ疲たり是において民劫掠物お走かり羊と牛と犢

とを取りて之を地のうへおころし血のまじりに之をくらふ人々
 サウルお切けていひける民肉を血のまじりに食ひて罪をエホバ
 ををりせとサウルいひける汝ら背けり直ちわがもとに大石
 をまろをしきたれ言サウルまたいひける汝らわかきて民のう
 ちにいりていへん各其牛と各其羊をわがもとに引ききたり此處
 みてみろしくらへ血のまじりて罪をエホバお犯するか
 と此において民おのゝみの夜其牛を手おひききたりて之をか
 しておみろせりエホバとしてサウルエホバに一つの壇をきづく是
 のサウルのエホバに壇を築ける始あり云うてサウルいひける
 の我ら夜のうちにペリシテ人を追くだり夜明までうれらを掠め
 て一人をも残すまじ皆いひたるの凡て汝の日に善とみゆる所を
 あせど時に祭司いひける我ら此あちかより神にもとめんと
 サウル神に我ペリシテ人をおひくだるべきを汝かれらをイスラ

エルは手あわたしたまふやと問ければ此日のみたへたまのさき
 是はおいてサウルいひけるの民の長たちよ此おちかよれ
 汝らみて今日のみの罪のいづくあるを知らんイスラエルを救
 ひたまへるエホバといく假令わが子ロナタンもあき必ず死な
 ざるべうらすとささど民のうち一人もとこにこたへさりき
 サウルイスラエルの人々いひけるのあんぢらの彼處をれ我ど
 わが子ロナタンの此處にをらんと民いひけるの汝等の目によし
 どとゆるとみころをみせサウルイスラエルの神エホバにいひ
 たるのねがひの眞實を去めしたまへどよくロナタンとサウ
 ル鐵ふあたり民のされたりサウルいひけるの我どわが子の
 あひだの闘を撃たど即ちロナタンこれふあたれりサウルヨナ
 タンにいひけるの汝がみせしとろを我につげよロナタンつげて
 いひけるの我の只は手杖の末をもて小計の蜜をみめしのミ

あるが我志るざるをえず君サウルこたへけるの神かくあしまた
 めさねてかくあしたまへヨナタンよ汝志るざるべうらす民サ
 ウルにいひけるのイスラエルの中此大いあるすくひをみせる
 ヨナタン死ぬべけんや決めて去うらすエホバの生くヨナタンの
 髪の毛ひとすぢも地にあつべうらす其のうれれどどもに今日
 たらきたればありどよく民ロナタンをそくひて死なざらしむ
 サウルヘリレタ人を追ふとを怠てのばりぬベリレタ人其國か
 へれりアハうくてサウルイスラエルの王の信あつきて四方の敵を
 攻む即ちモアブアンモンの子孫エドムツバの王たちあよびベリ
 レタ人をせめけるも凡てむあふどころにて勝利を得たり只サウ
 ル力を文アマレタ人をうちてイスラエルを其劫掠人の手よりす
 くひいだせりアハサウルの男子のヨナタンエスイあよびマルキレ
 エアあり其二人の女子の名の姉のメラブといひ妹のミカルとい

ふキサウルの妻は名のアミノアムといひてアヒマアズの女子なり其軍の長の名のアブチルといひてサウルは叔父なるチルの子ありキサウルの父ケレビアチルの父チルのアピエルの子ありキサウルの一生のあひだ恒にベリレラ人と戦し戦ありサウルの力ある人またハ勇ある人を見ることにもふれをうへたり

第十五節

一 茲にサムエルサウルにいひけるハエホバ我を問ハシ汝お膏を沃浴て其民イスラエルの王とあさめたりされバエホバの言の聲をきけニ萬軍のエホバあけいひたまふ我アマレクダイスラエルにゐせ宏事するハエホバトよりけはれる時其途を遮り志をうへりみるニ今ゆきてアマレクを撃ち其有る物をことしく滅しつくし彼らを憐むるハ男女童稚哺乳兒牛羊駱駝驢馬を皆ころせヨサウル民をよびあつめてこれをテライムに檢ふ歩兵二十万ユダハ人一万ありエホバあしてサウルアマレク

の邑にいたりて谷に兵を伏たりキサウルケニ人にいひけるハ汝らゆきてさりアマレク人をはあれくたるべし恐らくはかれらととも汝らをはろぼすハいたらんイスラエルの子孫のエホバトよりのばれる時汝らこれお恩みをほどゐあたりと即ちケニ人アマレク人をはあきてさりぬキサウルアマレク人をうちてハピラよりエホバトの東面あるレエルあいたるハサウルアマレク人ハ王アガクを生擒り刃をもて其民をみどしく屠らばせり然ともサウルと民アガクをゆるしまた羊と牛の最も喜きもの及び肥たる物並ハ羔と凡て善き物を獲して之をはろぼしつくすをのみとす但惡き弱き物をはろぼしつくせりナ時にエホバの言サムエルハの予みていはくハ我サウルを王となせしを悔ゆ其の彼背きて我あまたダハサウル命をおみなりされバありとサムエル獲て終夜エホバあよばふれりさあくてサムエルサウルにあえんとて夙

く起きけるにサムエルにつぐるものありていふサウルカルタル
 にいたり勝利の衣を立て轉り進みてギルガルおくだれりど
 ムエルサウルは許ふ至りけれバサウルみれぬひけるに汝がニ
 ホバより福祉を得んことをねがふ我エホバの命を行へりと昔サ
 ムエルいひたるは然ラバわが耳に在る此羊は豈およびわがきく
 牛のこゑの何ぞやサウルいひけるに人々これをアマレク人の
 どみろより引ききたきり其は良汝の神エホバにさげんため
 羊と牛は最も喜きものをのみせをる其はあり我らはろばしつ
 くせりサムエルサウルにいひけるに止まれ昨夜エホバの我
 うたりたまひしるどを汝お伺かんサウルいひけるにいへをサ
 ムエルいひけるにさき汝が微き者どもみづら憶へるときお剛
 スラエルの支派の長とありしおあらずや即ちエホバ汝お膏を注
 いでイストラエルの王とあせりエホバ汝を遣ふ遣はしていひた

まのく往て惡人あるアマレク人を得ろばし其盡るまで戦へよと
 ま何故汝エホバの言をきかずして敵の所有物おはせりよりエ
 ホバの目のまへお惡をなせしやサウルサムエルいひけるに
 我誠ニエホバの言おまたぐひてエホバのつりのしたまふ途お
 きアマレクは王アガグを執きたりアマレクをほろばしつくせり
 三た々民其得ろば志つくそべき物の最初としてギルガルおて汝
 の神エホバあさげんとて敵の物の中より羊と牛をどれり三サ
 ムエルいひけるにエホバの言おまたぐふ事を善したまふ
 どく燔祭と犠牲を善またまふや夫れ順ふ事の犠牲にまさり聴く
 事は牡羔の脂にまさるなり其の違逆は魔術の罪のおどく抗戻
 は虚しき物おつるふる如く偶像お伺ふるおどし汝エホバの
 言を棄たるによりエホバもまた汝をすて王たらしめめめたま
 ふ言サウルサムエルにいひけるは我エホバの命と汝の言をやふ

りて罪ををりしたり是の民をおろきて其言に忘たぐひたるに
 りてありされを今ぬぐのわがつみをゆるし我どもに
 へりて我をしてエホバを拜するふとを文さしめよサムエル
 ウルにいひけるは我汝どもにへらじ汝エホバの言を察たる
 ゐよりエホバ汝をすてよイスラエルお王たらふめたまはされバ
 なりサムエル去らんとて振還しときサウルの明衣は襪を脱
 へしを裂たりサムエルかれにいひけるは今日エホバイスラ
 エルの國を裂て汝よりはるし汝の隣る汝より善きものあふき
 をあたへたまふまたイスラエルの能力たる者の識らず候す其
 はかれの人にあらざるべくゆるふとあしサウルにいひけるは我
 罪ををししたれとぬぐのくは民の長老のまへあよびイスラ
 エルのまへて我をたふとて我どもあへり我をして汝の
 神エホバを拜むとを文さしめよ三こよふおいてサムエルサウ

ルおまたぐひてかへるまうしてサウルエホバを拜む三時おサム
 エルにいひたるを汝らわが言にアマレクの王アガグをひきたれ
 とアガグ喜をしげおサムエルの言ふきたりアガグにいひけるは死
 の苦みの必ず過さるぬサムエルにいひたるは汝の劍のお得くは
 婦人を子なき者どあせりかくのごとく汝の母は婦人の中の最も
 子なき者どあるべしとサムエルギルガルにてエホバのまへにお
 いてアガグを斬り言うくてサムエルをラマにゆきサウルとサウ
 ルのキヘアおのぼりてその家にいたるサムエル其あぬる日ま
 でふたたびきたりてサウルをみきりきまられどもサムエルサウ
 ルのためにかあしめりまたエホバのサウルをイスラエルの王どあ
 せしを悔たまへり

第二十四節 爰にエホバサムエルにいひたまひけるは我をでおサ
 ウルを察てイスラエルお王たらしめざるふ汝いつまであれのた

めに歎くや汝の角に膏油を満してゆけ我汝をベラレヘム人エ
 イの許ありてさん共の我其子の中にひとり王を尋ねえたれ
 ばありニサムエルいひける我いうで往くことをせんサウル聞
 て我をこそさんエホバいひたまひける汝一鞭を搦へ仰きて言
 へエホバに犠牲をささげんために來るとエホバは告げてエサイを
 牲の場あよべ我汝が爲すべき事を止めさんわが汝を告るともろ
 の人膏をろうぐ可しニサムエルエホバは語たまひしごとくあし
 てベラレヘムあいたる邑の長老あうきて之をむるへいひける
 汝平康なる事ためたにきたるやニサムエルいひける平康なる
 みどのためあり我のニホバに犠牲をささげんとてきたる汝ら身
 をきよめて我どもに犠牲は場にきたれど斯てエサイと其諸子
 を潔めて犠牲は場あよびきたるハかきらぐ至れる時サムエルニ
 リアブを見ておもへらくエホバの膏をささぐものハ必ず此人なら

んどあたるハエホバサムエルいひたまひける其容貌と身
 長を觀るなりと我すでにわれをすたりわが臆るところの人に
 異なり人の外に貌を見エホバの心をみるなりハエサイアピナ
 ダブをよびてサムエルのまへを過しむサムエルいひける此人
 もまたエホバ擇きたまふエサイを過しむサムエルいひける
 ルいひける此人もまたエホバえらみたまふエサイ共七人
 の子をしてサムエルのまへをさしむサムエルエサイいひける
 ホバ是等をえらみたまふエサイいひける尙季子のこれり彼の羊を
 牧するなりとサムエルエサイいひける彼を遣へきたらしめよ
 かれが此にいたるまで我ら食ふ就つぎるべし是に於いて人
 をつうえしてかきをゆききたらしむ其人色赤く目美しくして其
 貌麗しエホバいひたまひける起てみ色あふらを沃げ是其人

ありて此日よりのちエホバの鑑ダビデの予むサムエルのたちて
 ラマにゆけり古かくてエホバの鑑サウルをはるれエホバより來
 る惡鬼これに懼せりまサウルの臣僕これにいけるに祝よ
 り來れる惡鬼汝を弄やますまねがえくのわれらの主汝のまへに
 つりふる臣僕を命じて善く琴を鼓く者一人を求めしめよ嗣より
 きたれる惡鬼汝を臨む時彼手をもて琴を鼓て汝いゆることを乞
 んてサウル臣僕にいけるにわがため巧みなる者たづねて
 わがもどあつきたきとき一人の少者ふたへていひたるに我
 ベテレヘム人エサイの子を見し琴に巧みしてまた豪氣して善
 くらよりふ辯舌のやりなる美しき人なりか何エホバみれとど
 もあいますまサウルをわがもど遣はせどエサイする
 るに羊をらふ汝の子ダビデをわがもど遣はせどエサイする

之ち驢馬にパンを負せ一囊の酒と山羊の羔を執りてふきを其子
 ダビデの手によりてサウルおおくきりニダビデサウルの陣にい
 たりて其まへに事ふサウル大にふれを愛し其武器を執る者ど
 すニサウル人をニサイふつりのしていひたるにねがはくのダビ
 デをしてわが前に事へしめよ彼にわが心あかへりといひ神より
 出たる惡鬼サウルを臨めるときダビデ琴を執り手をもてふきを
 彈ふサウル怒さきて愈々惡鬼かれをはる

第十六章

一爰にベリレテ人其軍を集めて戦はんとしユダを屬そ
 るレロコをわつたりレロコとアセカの間にあはるバサダムを陣を
 ぐるニサウルとイストラエルの人々集まりてエラの谷に陣をどり

ベリレテ人にむひて軍の陣列をたつニベリレテ人の此方の山
 あたりにイストラエルの彼方は山にたつ谷に其わひだふあり口時小
 ベリレテ人の陣よりガラのゴリアテと名くる挑戰者いできたる

其身の長六キユビト半ニ首ヲ銅の盔を戴キ身ヲ鋼織の鎧甲を着たり其よろひの銅のちもさの五千ロケルありキまた匣の銅の匣當を着け肩の間ニ銅の矛戟を負ふニ其槍の柄ハ楓の梁のごとく槍の鋒刃の鉄ハ六百ロケルあり槓を執る者其前ニゆくハゴリテ立テイストラエルの謀行伍ニヨバヨリイヒけるニ汝らのみんテ陣列を命じていできたるや我ハベリレテ人にして汝らのサウレ臣下ニあらずや汝ら一人をえらみて我どころあくだせ共人も我とたよかひて我をころすみをえ我ら汝らの臣僕となりんさとせ若し我かちてみれを殺さむ汝ら我らの僕とありて我らに事ハ可レシヤかくて此ベリレテ人イヒけるニ我今日イストラエルの謀行伍を挑む一人をいだして我と戦ひしめよとサウルおよびイストラエルみるベリレテ人のこの言を聞き驚きて大いに懼れたりま抑ダヒデアのかのベテレヘムユダのモフラテ人ニサイとるづ

くる者の子あり此人ハ八人の子ありレダサウルの世に年過みてすでニ老たりニエサイの長子三人のきてサウルおまたグひて戰にいつ其戰にいでレ三人の子の名ハ長をエリアブといひ次をアヒナダブといひ第三をレヤンマといふニダヒデアの手にして其兄三人ハサウルおまたグヘリマダヒデアのサウルに往來してレテレヘムにて其父の羊を收ふニ彼ベリレテ人四十日ハあひだ朝夕近づきて前ニあたりて時ハエサイ其子ダヒデアイヒけるニ今汝の兄のため此畑麥一斗と此十のパンを取りて陣營ニをる兄のどころにいろうぎゆけままた此十の乾酪をとりて其千夫の長ハあくり兄の安否を視て其返事をもちきたれとサウルと彼等ハよびイストラエルの人は皆ベリレテ人となたりてエラの谷ニありキマダヒデア朝風クおきて羊をひどりの牧者ニあつてエサイの命ぜしごとく歸ヘゆきて車營ニいたるハ軍勢いでテ行伍をなし歸

て歸りて其父の羊を收ふニ彼ベリレテ人四十日ハあひだ朝夕近づきて前ニあたりて時ハエサイ其子ダヒデアイヒけるニ今汝の兄のため此畑麥一斗と此十のパンを取りて陣營ニをる兄のどころにいろうぎゆけままた此十の乾酪をとりて其千夫の長ハあくり兄の安否を視て其返事をもちきたれとサウルと彼等ハよびイストラエルの人は皆ベリレテ人となたりてエラの谷ニありキマダヒデア朝風クおきて羊をひどりの牧者ニあつてエサイの命ぜしごとく歸ヘゆきて車營ニいたるハ軍勢いでテ行伍をなし歸

彼をあげたりと志ありてイスラエルをベリレテ人陣列をたてし
 行伍を行伍に相むらひせたりとダビデ其荷をよろして荷をまも
 る者の手あはたし行伍の中あはせゆきて兄の安否を問ふとダビ
 デ彼等と俱お語さる時彼よりベリレテ人の行伍よりガツのベリレ
 テのゴリアテとあつくる彼の挑戦者のぼりきたり前れみとバの
 ととく言しうをダビデ之を聞けり言イスラエル人其人を見て
 皆逃て之をはるき痛く懼れたり言イスラエルのいひけるは汝
 らみの代ぼり來る人を見しや誠おイスラエルを挑んとて上りき
 たるなり彼をこそす人の王大なる富を以てみきをどまし其女子
 をこれにあたへて其父の家おのイスラエルの中に租税をまぬ
 るよしめんんダビデ其傍あたてる人々おたりていひけるは此
 ベリレテ人をみろしイスラエルの恥辱を雪ぐ人に如何あるて
 とをさすや此劍通るきベリレテ人の誰あきバか活る神の軍を

擡む民まへのごとく答へていひけるはかきを殺す人への斯の
 ととくせらるべしと云兄エリアブダビデが人々どかたるを聞し
 るをエリアブダビデあむらひて怒りを發しいひけるは汝あふの
 ためお此お下りしや彼の野ああるわづらの羊を誰にあづけしや
 我汝の傲慢と恐き心を知る其汝戦争を見んとて下きバなりと
 ダビデいひけるは我今なにをさしたるや只一言あわらずやと
 又よりむきて他の人あむらひ前のおとく語れるお民まへのおと
 く答たり三人々ダビデが語れる言をきよてみきをサウルのまへ
 におけよれをサウルかれを召す言ダビデサウルおいひけるは人
 々かれがためお氣をおとすべからず僕ゆきてかのベリレテ人と
 たよりえん言サウルダビデおいひけるは汝のかのベリレテ人を
 むらへてたよふお勝す其汝の少年あるおかき若き時より
 の戦士なれをさり言ダビデサウルおいひけるは僕さきお父の羊

を牧るふ獅子と熊と來りて其群の羔を取たれを其後を以て
 之を搦ち羔を其口より抜ひいだせり去りして其獸我を狂りあり
 りたれば其鬚をどらへてみれを撃ちみろせり僕も既ふ獅子と
 熊とを殺せり此訓禮なきベリレテ人活る神の軍をいとみたれを
 亦かの獸の一れおどくあるべしモダビデまたいひけるハエホバ
 我を獅子れ爪と熊の爪より抜ひいだしたまひたれを此ベリレテ
 人の手よりも抜ひいだしたまはんとサウルダビデあいふ往けぬ
 ガハクハエホバ汝とともいませ是に於いてサウルおのこれ
 滅衣をダビデに衣せ劍の蓋を其首にひらせ亦綱繩の鏝をこき
 ぬきせたりモダビデ滅衣のうへに劍を佩て往らんことを試む未
 だ聽せしむどなればありあはしてダビデサウルあいひけるハ
 我いまだ聽せしむどなれば是を衣て往くあたはずと早ダビ
 デこれを脱ぎて手お杖をどり歸間より五の光滑ある石を拾ひ

て之を其持てる牧羊者の具ある袋お容き手に投石索を執りて彼
 ベリレテ人おちうづくモベリレテ人進みきてダビデに近づたり
 楯を執るもの其まへおありモベリレテ人環視てダビデを見て之
 を藐視る其ハ少くして赤くまた美しき貌なきバありモベリレテ
 ハダビデあいひけるハ汝杖を持てきたる我豈大あらんやとベリ
 レテ人其神の名をもつてダビデを呪詛ふ言ふくしてベリレテ人
 ダビデあいひけるハ我どもどに來れ汝の肉を空の鳥と野の獸お
 あたへんとモダビデベリレテ人にいひけるハ汝ハ劍と楯と矛
 をもて我おきたる然也我ハ萬軍のエホバの名するを汝お搦み
 たるイストラエルの軍の神の名をもて汝にゆく異今日エホバ汝を
 わが手お付したまはらんわれ汝をうちて汝の首級を取りベリレテ
 人の軍勢の尸體を今日空の鳥と地の野獸おあたへて全地をして
 イストラエルに神あることをおらしめん且又この群衆みるエホ

パの救ふ劍と槍を用ひたまひ給るみどを去るおいたらん其の
 戦ハエホバふよきを汝らを我らの手に返したまはんと云ヘリ
 レテ人すなはち立ちあがり進みちりつきてダビデをむかへしるバ
 ダビデいろき陣ふはせゆきてペリレテ人をむるふ衆ダビデ手を
 實にいきて其中より一つの石をどり投てペリレテ人の額を撃け
 れバ石其額に突き入りて俯伏に地おたふれたり幸なくダビデ投
 石索と石をもてペリレテ人にちちペリレテ人をうちて之をころ
 せり然とダビデの手に劍ありしるバ三ダビデは立ちてペリ
 レテ人の上のり其劍を以て之を鞘より抜きはるしよきをもて
 かきをころし其首級を斬りたり爰にペリレテの人々其勇士の
 死るを見てにげしかむイスラエルとユダの人おこり嗷呼をあ
 げてペリレテ人をおひガラの入口およびエクロンの門にいたる
 ペリレテ人の負傷人シヤライム路お仆れてガテおよびエクロ

ンあふよきイスラエルの子孫ペリレテ人をあふてかへり其陣
 を掠む言ダビデ前のペリレテ人の首を取りて之をエルサレムに
 たづさへきたりしガ其甲冑ののれの天幕おけり云サウルダ
 ビダガペリレテ人あむひて出るを見て軍長アブテルあひひ生
 るハアブテル此少者のたれの子あるやアブテルいひけるハ王汝
 の靈魂の生くわきあらざるあり王いひけるハ少年のたき
 の子あるを尋ねよモダビダかのペリレテ人を殺してかへれる
 時アブテルこそをひきて其ペリレテ人の首級を手にもてるまよ
 サウルのまへつよきけられバサウルかれにいひけるハ若き
 人よ汝のたれの子あるやダビデふたへけるハ汝の僕ベラレヘム
 人エサイの子なり

第十八章
 ダビデの心おむすびつきてコナタンおのきの命のごとくダビデ

を愛せり。此日サウルダビデをかよへて父の家かへらしめず。
 エヨナタンおのれは命のごとくダビデを愛せしむをヨナタンと
 ダビデ契約をむすべり。ヨナタンおのれの衣たる明衣を脱て
 ダビデにあたふ。其戎衣および其刀も弓も帯もまたあかせり。ダ
 ビデの凡てサウルが遣はそどろかひでゆきて功をあらひしけれ
 バサウルをれを兵隊の長とあせりまうしてダビデ民の心にあ
 ひ又サウルの僕の心もかあふ。ホ衆人かへりきたれる時する
 ちダビデペリシタ人をあろして還れる時婦女イストラヘルの色々
 よりいできたり。戯と祝歌と樂をもあて歌ひまはつ。サウル王を
 迎ふ。婦人踊躍つ。相みたへて歌ひけるはサウルの千をうち殺
 し。ダビデの萬をうちころそ。ハサウル甚だ怒り。其の言をよるこ
 ろをよめていひける。萬をダビデあ歸し千をわれあ飯す。此上くれ
 おわたふべき者の唯國れみど。サウルこの日より後ダビデを目

かけたり。次の日神より出たる悪鬼サウルの手みてサウルの
 あるて預言者たりしか。バダビデ故のごとく手をもつて琴をひ
 たり。時サウルの手に投槍ありけれ。バサウル我ダビデを壁に
 刺とほさんといひて其投槍をさしあけし。ダビデ二度身をかほ
 してサウルをさなたり。エホバサウルをはるきてダビデと共
 います。およりてサウル彼をあらたり。是故サウル彼を遠き
 けて千夫長とあせり。ダビデするのち民のまへあ出入を言また。ダ
 ビデすべて其ゆくどあろふて功をあらひし。且エホバかれども
 ないませり。サウルダビデが大功をあらひすをみてこれを恐
 れたり。まあかれどもイストラエルとエダの人のみなダビデを愛せ
 り。彼が其前あ出入するおよりてあり。サウルダビデいひける
 の。思れわが長女メラブを汝あ妻さん。汝た。思。ダ。ため。不。勇。ミ。エ。ホ
 の軍に戦ふべし。其のサウル。思。ダ。手。あ。て。う。れ。を。殺。さ。で。ペ。リ。シ

人ハ手にてころさんどもひたれをなり
 父の家ノイヌラエルお
 いて何ある者予や我い前でか王は婿とあるべけんども然るにサ
 ウルの女子メラブはダビデに嫁ぐべき時におよびてメホラ人ア
 デリエルに妻さきたりニサウルの女ミカルダビデを愛す人まど
 を王亦告れをサウル其事を善しとせりニサウルいひけるハ我ミ
 カルをりれにあたへて彼を謀る手段となしベリセラ人ハ手にて
 りきを殺さんといひてサウルダビデいひけるは汝今日ふたよ
 び且ダ婿とあるべしニあくてサウル其僕お命じけるを汝ら密お
 ダビデにうたりて言へ祇よ王汝を恨び王の僕ミカル汝を愛せされ
 を汝王の婿とあるべしとニサウルの僕此言をダビデの耳に語りし
 りをダビデいひけるハ王の婿とあるまど汝らの目には易き事と
 みゆるや且われハ貧しく賤しき者なりと言サウルは僕サウルお

のげてダビデ是の如くかたれりといへりニサウルいひけるハあ
 んぢらかくダビデいへ王の聘禮を望まずたハベリセラ人の陽
 皮一百をえて王の仇をむくいんまどを望むと是ハサウルダビデ
 をベリセラ人の手ハ刃汝まめんどもおもへるありニサウルの僕此
 言をダビデあつかしりてダビデハ王は婿となるまどを善とせり
 斯て其時いまだ満ざるあひだおダビデ起て其従者どもにゆ
 きベリセラ人二百人をふるして其陽皮をたづさへきたり之を悉
 く王にさしげて王の婿とあらんとをサウル乃ハ其女ミカルを
 ダビデお妻せたりニサウル見てエホバのダビデどもにいをを
 を知りぬばたサウルは女ミカルハダビデを愛せりニサウルさら
 にますハダビデを恐れサウル一生のあひだダビデの敵とみれ
 り手爰にベリセラ人の諸伯攻きたりしダビデアクれらダ攻め
 きたるおどにサウルは諸の臣僕より多の功をたてしりバ其名

はるいだ尋たづねまる
 サウル其子ヨナタンあよび諸の臣しもべ僕しもべハダビデをみろ
 さんとそるみどを誦たがれりニされどサウルれ子ヨナタン深くダビ
 デを愛せしむバヨナタンダビデあつけていひけるわが父サウ
 ル汝をみろさんこどを求むこれあふ今ねがはくの汝盟朝いっせ盛さか倍
 で深こほみをりて身を隠せ我いでもきて汝がをる野にてわが父の
 傍にたちわが父とどもに汝の事を諒あやまらん志こころして我其事の如何
 あるを見て汝あ告ぐべしヨナタン其父サウルあむかひダビデ
 を褒揚ほめていひけるの願ねがひ王き其僕ダビデにむりひて罪ををらす
 ありれ彼の汝あ罪ををかさすまたくれが汝にあす行為にはるい
 だ善しニまたあききは生命をうけてりのペリレアをころしたり
 末すえくしてエホバイスラエルの人々のためあ得いある救を得と
 みしたまふ汝見てよるみべりあるに何予もあるく去てダビデ

をころし無辜者の血をふがして罪をよりさんとするヤサウル
 ヨナタンの言を聴いよサウル報ひけるハエホバはいくわれあ
 らすくれをみろさきヨナタンダビデをよびてヨナタン其事を
 みろダビデにつげ還にダビデをサウルに許につれきたりけれを
 ダビデさきのごとくサウルの前にをるハ愛に再び戰爭あふりぬ
 ダビデするわらいでよペリレア人どたよかひ大いにかれらを殺
 せしかばあきら其まへを逃げさきりサウル手に投槍を執て室
 に坐する時エホバより出たる恐鬼あればのりう切れり其時ダビ
 デ乃ち手をもて琴を弾くサウル投槍をもてダビデを壁に刺ど
 はさんと志たりしがダビデサウルれまへを避ければ投槍を壁に
 衝たてたりダビデ其夜逃さりぬサウル使者をダビデの家につ
 けりしてくれを守らしめ朝あよびてくれをみろさしめんどす
 ダビデの妻ニガルダビデにつけていひける之若し今夜爾の命を

振すくずバ明あきら朝あさ汝きみの殺ころされんとまミカルミカル即すなはちまよりダビデダビデをつきあろし
 けれバ往ゆて逃にげされりまま期まてミカルミカル僕こゝをとりて其その牀とこを置おき山やま羊やぎ牀とこ
 毛けの編か物を其その頭あたまにおかき衣服いふくをもて之これをおかへり言いハサウルサウルダビデ
 を執とふる使つか者ひをつらとしけれバミカルミカルいより是こゝの疾やまひありとまま
 ウル使つか者ひをつかひしダビデダビデを見みさせんとていひけるいかれを牀とこ
 のままに我われにたづさへきたれ我われみ色いろをみろさんま使つか者ひいりて見みた
 るま牀とこにい僕こゝありて其その頭あたまに山やま羊やぎ牀とこ毛けの編か物ものありきままサウルサウルミカ
 ルミカルいひけるいえあんあんううく我われをああきあひひきてま旦あした敵たを逃にげしまやまりし
 やミカルミカルサウルサウルにいたへいけるま彼かれ我われにいへり我われをまなちてまさま
 しめま然しからまサバ我われ汝きみをみろさんさんとまダビデダビデああげまさまりてまラマラマにいゆ
 きサムエルサムエルの附つきああたりてサウルサウルガおのれれああるませしまことをま
 ぞまめりまサウルサウルに告つぐる者ものありていふい視みよダビデダビデハハラマラマのナヨナヨヲヲ

にとるまとまサウルサウル乃すなはちダビデダビデを執とふる使つか者ひをつらとせままま彼等かれら
 預い言ひ者もののい其その預い言ひしまをりてサムエルサムエルガ其その中なかの長ちやうとなりて立た
 るまを見るまふまおまよま以も神かみの靈たまサウルサウルの使つか者ひの予まみまて彼等かれらもまた預い
 言ひせりま三人さんにん々々ここを告つげまけれバサウルサウル他たの使つか者ひを遣ましまけるまあまるま
 ちも亦また預い言ひせしまかまサウルサウルまた三さん度たび使つか者ひを遣まえしまけるま彼等かれらも
 また預い言ひせりま是こゝにいてサウルサウルもまたラマラマああゆまきまけるまダセまク
 の大おほ非とがにいたまれるま時とき聞きていひけるいサムエルサムエルとダビデダビデハハ何なに處ところに
 をるまや答こたへていふいラマラマのナヨナヨヲヲああをるまサウルサウルううしまみにいゆまきて
 ラマラマのナヨナヨヲヲいいたりまけるまに神かみの靈たままた彼等かれらの予まみまて彼等かれらの
 ナヨナヨヲヲにいたるまで歩あきまつま預い言ひせりま言い後あともまた其その衣服いふくをぬぬぎ
 ずまて同おなくサムエルサムエルのままへま預い言ひしま其その一日いちにち一いち夜よ裸はだか体みなまてま休やすみまたり
 是こゝ故ゆゑに人々ひとびとサウルサウルもまた預い言ひ者ものれれうちうちにいるまかまいまふ
 一いちダビダビラマラマのナヨナヨヲヲより逃にげたりてヨナヨナタンタンいいひ

けるの我何をなし何れわしき事あり汝の父のまへ何の罪を得
 てう彼わが命を求むるヨナタンかれにいひける汝決して殺さ
 るよみどわらじ視よわが父の事は大いあるも小あるも我につげ
 ずしてゐすことなし且が父あんずみの事を我おかくさんやみの
 事法からすニダビデはた誓ひていひける汝の父必ず且が汝の
 まへお思惑をうるを知る是をもてあき思へらく恐らくのヨナタ
 ン悲むべきをその事をうれふ未らしむべからずと云ふは只一
 エホバはいくまたあんぢの靈魂はいく且れ之死をさるふと只一
 歩のミロヨナタンダビデにいひけるあんぢの心をもにをねがふ
 う我爾のために之をあさんとエダビデヨナタンにいひける明日
 の月朔あれば我王どもお食ふつらざるべうらず然ども我をゆ
 るして去らしめ三日の晩まで野お隠るよとを文さしめよ若汝
 の父まことお我をもとめらば其時言へダビデ切お其邑へラレハ

▲おとせゆらんことを我に請り其は彼處に全家の族祭あきとあ
 りと彼復もし善しといえ。僕やすらはんれと彼もし甚しく怒
 らば彼の害をくへんと決しをなせ汝エホバのまへお僕と契
 約をむそびたれを願くの僕に思をほどとせ然と若我お恐き事あ
 らば汝自ら我をころせ何や我を汝の父お引ゆくべけんやヨナ
 タンにいひけるの斯る事うらず汝にあらされ我わが父の害を汝
 おくえへんと決るを去らば必ず之を汝お引けんダビデヨナタ
 ンにいひけるの若し汝の父荒々しく汝おふたふる時の誰か其事
 を我お告ぐべきやヨナタンダビデにいひけるの來れ我ら野お
 いでゆらんぞ俱に野にいでゆけりまをりしてヨナタンダビデお
 いひけるのイストラエルの神エホバよ明日う明後日の今とろ我
 が父を殺ひて事のダビデのためお善きを見なぐら人を汝お遣の
 して告しらすすエホバヨナタンに斯るじまた重て斯くみした

まへに三されど若しわが父汝に害をくわへんと欲せば我これを告げ去らせて汝をにがし汝を安らうあさらしめん願くはエホバわが父とともお坐せしごとく汝とともにいませば汝只わが生るあひだエホバの恩を我にしめして死ざらしむるのまゐらずまエホバがダビデの敵を悉く地の表より絶ちさりたまふ時おもまた汝は家を永く汝の思にはるまゝ去むるありれまなくロナタンダヒアの家と契約をむそエホバのお關てダビデの敵を討したまへりま志りしてロナタンふたゝびダビデに誓はしむられを愛せられたるあり即ちれのれの生命を愛するごとく彼を愛せりままたロナタンダヒデにいひなるの明日の月朔あるが汝の座空するべなきを汝求めらるべし汝三日とまりて速りに下り備てりの事の日お隠れたるとふるに至りてエセルの石の傍に居るべし我的を射ることくして其石の側に三本の矢をはなたん三まうして仰き

て矢をたづねよといひて童子をつゐのすべし我もし故お童子お視し矢の汝の此旁あり其を取て曰ばなんぢきたるべしエホバは生く汝安くして何もあるべたればあり三さまと若し我少年に祇よ矢は汝の彼旁にありといはば汝さるべしエホバ汝をさらしめたまふあり三汝と我とあたれることあついでに願わくはエホバ恒に汝と我との間にいませとダビデ即ち野あうくれぬ借月朔ありたれを王坐して食お就く三即ち王は常のむとく壁およりて座を占むロナタン立ちあがりアブテルサウルの側に坐せダビデの座にいひみしとされと其日おのサウル何をも曰きり其の何事か彼おれありしあらん彼きよりらず定て潔うらずと思ひたればなりと明日するのち月の二日にたよびてダビデの座おは座しサウル其子ロナタンおいひなるの何ゆゑにエサイの子の昨日も今日も食お來らざるや三ロナタンサウルおみたへたるはダ

ビテ切きハベテレレヘムムホホののんんみみどどをを我われホホみみひひてて曰いははるるハハネネガ
 ンンククハハ我われををののるるしてしてゆゆめめししめめよよわわガガ家いへ邑むらホホテテ祭まつりををああずずホホよよりりわ
 ガガ兄あに我われホホきたきたるるみみどどをを命いのちぜぜりり故ゆゑホホ我われももしし汝きみのの空あまへへああめめぐぐミミををえ
 たるたるああららををねねガガンンククハハ我われををののるるしてして去いままめめ兄あに弟いもうとををととるるみみどどをを得え
 させさせししめめよよどど是こゝ故ゆゑホホふふりりききハハ王きんぎょのの席くらホホ來きららぎぎるるナナリリササウウルルココナナムム
 シシホホむむりりひひてて怒おこりりをを發はらししめめははいいひひたたるるハハ汝きみハハ曲まがりり且かつ悖かたがれるる婦よめ
 のの子こホホありあり我われホホ汝きみガガエエササイイのの子こをを簡ひらてて汝きみのの身みををははづづかかししめめ立た
 たた汝きみのの母ははのの膚かわをを辱はなぢぢむむるるみみどどをを知しららんんヤヤエエササイイのの子こハハ此こゝ世よ
 小こナナガガららふふるるハハひひだだハハ汝きみとと汝きみのの仇あだ回くわくくたたつつをを得えずず是こゝ故ゆゑハハ今いま人ひとを
 つつかかははしてして彼かれををわわガガ計はかりにに引ひききたたれれ彼かれハハ死しぬぬべべきき者ものありありココナナムム
 ンン父ちちササウウルルホホ對たいへへてていいひひたたるるハハ彼かれホホよよりりてて殺ころささるるべべききリリココナナムム
 ををああしたしたるるヤヤトト三さんふふままホホたたいていてササウウルルココナナムムをを辱はなぢぢささんんどどてて投なげげ
 ををささししわわげげたりたりココナナムムすすななりり其その父ちちハハダダビビアアをを殺ころさんんどど決きし

ををああれれりり言いひひててココナナムム烈はげしくく怒おこりりてて席きをを立たちち月つきのの二に日にちハハ
 食たべべををななささききりりきき其その父ちちののダダビビアアををははづづりりししめめたたよよりりててダダビビアア
 ののたためめホホ憂うれへへたたととババありあり聖ふたご朝あさココナナムム一ひとリリ童こ子ごをを從したがハハダダビビアア
 アアとと約やくせせしし時とき刻ときホホ野のににいいででももきき童こ子ごハハいいひひたたるるハハ走はりりてて我われハハあ
 つつ矢やををたたづづねねよよ童こ子ごハハししるる時ときココナナムム矢やをを彼かれののささききホホ發はててりり
 童こ子ごガガココナナムムのの發はちちたたるる矢やののととみみろろハハいいたたれるる時ときココナナムム
 童こ子ごののううししろろにに呼よべよりりてていいふふ矢やハハ汝きみののささききハハああららずずヤヤハハ
 ココナナムムままたた童こ子ごれれううししろろホホよよババりりてていいひひたたるるハハ速はやくくににせせよ
 急いそげげ止とままるるああらられれトトココナナムムのの童こ子ごハハ矢やををひひろろひひああつつめてて其その主しゅ人にん
 ののももどどににああへへるるままさされれトト童こ子ごハハ何なにををもも知しららずず只ただココナナムムトトダ
 ビビアア其その事ことををししりりたたるるののミミ事ことああくくててココナナムム其その武ぶ器きをを童こ子ごにに授たづなてて
 いいひひけるるハハ往ゆ々々ここをを邑むらホホ推おへへよよ童こ子ごををああららちち往ゆけけりり時ときにに
 ダダビビアア石いしのの傍そばよりり立たちちああぐぐりり地ちににふふしてして三さんたたびび拜ひらせせりりああららしてして

ふたり互に接吻してたぐひお哭くダビデ孫おはるはだし目ロナ
 マンダビデおひひたるの安じて往々我ら二人ともおエホバの名
 お招ひて願くはエホバ恒お我と汝のあひだお坐し我が子孫と汝
 の子孫のあひだにいませといへりとダビデするのちたちて去る
 ヨナマン色おいりぬ

第二十三章

ダビデソブおもきて祭司アヒメレクにいたるアヒ
 メレク懼れてダビデを逃へこれおひひける汝なんぞ爾おして
 誰も汝ともおらざるやエダビデ祭司アヒメレクおいふ王我に
 一の事を命じて我にいふ我が汝を遣ひすどころは事れよび且
 汝に命じたる所について何をも人にしらするのれど我某處に
 我少者を出たり三いば何う汝の手おあるや我手に五のバツク
 或るおあてもある所を與よ祭司ダビデお對へていひけるの
 常のパンのわが手おあるしされど若し少者婦女をだお憤みてあり

志ならバ聖きパンあるありとエダビデ祭司お對へていひけるの
 實に足ぐいでしより此三日の婦女おきらにちうづりす且少者等
 の器の潔き又パンの常の物のごとし今日器お潔きパンあきバ殊
 に然どお祭司うれお聖きパンを與たり其のあしこに供前のパン
 け外はパン无りけきバあり即ち其パンの下る日お熱きパンをさ
 上げんとて之をエホバのまへより取されるあり其日うしふお
 サウルは僕一人留められてエホバのまへにあり其名をドエグど
 いふエド人にしてサウルの牧者お長なりエダビデまたアヒメ
 レクおいふ此に汝の手に槍の劍あらしぬか王の事急あるふよりて
 我の刃も武器も携へざりしと祭司いひける汝がエラバ谷お
 て殺したるベリレテ人オリアアの劍布お裏みてエホバは後にあ
 り汝もし之をぞらんとれもの取き此にのほかの劍なまダビデ
 いひけるのちれにまさるものおし我にあたへよとエダビデ其日

サウルをたうれて立てガラの王アキセルはどろに逃げゆきぬ
 ナキセルの臣僕アキセル曰ける此の其地の王ダビデおあらずや
 人々舞踏はうちらにみの人のことを歌ひあひてサウルの千をうち
 ころしダビデの萬をうちころすといひしにあらずやダビデは
 此言を心に藏め深くガラの王アキセルをおろれま人のまへにて
 伴て其氣を變じ執りて狂人のさまををし門の扉に盡き其涎沫
 を顔にぬぐれくだらまひ言アキセル僕あひひける汝の見るこ
 とく此人の狂人あり何ぞこれを我あひひきたるや我あらず狂
 人を須ひんや汝ら此者を引きたりて是がまへに狂しめんとする
 や此者あらず吾が家あひるべけんや

【註】

是故

ダビデ其處をいでたりてアブラムの洞穴あ

はぐる其兄弟および父の家みる聞きおよびて彼處にくだり彼の
 許あいたるはまた惱める人負債者心に嫌ぬ者皆あとの許にあつ

たりて彼其長となれしかれどもにある者とおよる四百人あり
 エダビデ其處よりモツアのモツバあいたりモアブの王あひひた
 るの神の我をいけりあしたまふりを知るまでねがえくりわが父
 母をして出て汝らとともをらしめよと口つひに彼らをモアブ
 は王たまへあつれきたるかきらひダビデが要害ををる間王と
 もあありき預言者ガダバデあひひけるは要害に住るあつれ
 ゆきてエダの地あいたれどダビデゆきてハレタの叢林あいたる
 爰にサウルダビデれよびるれどもある人々は見露さきしを
 聞けり時にサウルのヤベアにあり手と槍を執て岡樹は柳の樹の
 下ををり臣僕ども皆其傍にたりてサウル射にたてる僕にいひ
 ける汝らベニヤミン人聞けよエサイの子汝られのくは田と
 葡萄園をあたへ汝られのくを千夫長百夫長とあすみとあら
 んや汝ら皆我に敵して謀り一人もわが子のエサイれ子と契約

をむすびしを我^レ切^レげ去^レらする者^ハ去^レまた汝^ハ一人^モわがため
 お憂^ヘすわが子^ガ今日^ノのごとくわが僕^ヲをよげせして道^ニ僕^テ我^レ
 をえらひ去^レめんとするを我^レに切^レげしらしそ者^ハしエ時^ハエリ人^ニ
 エニグサウル^ノの僕^ノの中^ニあたち居^リしガ答^ヘていひけるハ我^レエサ
 イれ子^ノのノブ^ニもきてアヒトブれ子^ハアヒメレグ^ニいたるを見^シ
 ガアヒメレグ^ノのたためエホバ^ハ問^ヒまたるれに食物^ヲをあ
 たへベリレテ人^ニゴリアテ^レ鎧^ヲをあたへたりと王^ハするハち
 人を切^レりしてアヒトブの子^ハ祭司^{アヒメレグ}およびろの父^ノ
 家^ニするハちノブ^ノの祭司^{タル}人^々を召^シたれをみる王^ハ許^サさきた
 るまサウル^ハいひけるハ汝^ハアヒトブの子^ハ恥^ヤ答^ヘけるハ主^ハ我^レみ
 まありまサウル^ハいひけるハ汝^ハなんぢエサイの子^トども我^レに
 敵^シして謀^リ汝^ヲれハバンド劍^ヲをあたへ彼^ガ爲^ニに神^ニに問^ヒられを
 去^レ今日^ノのごとく道^ハ僕^テ我^レをえらひ去^レめんとするやゴリアテ

レグ王^ハあまたへていひけるハ汝^ノの臣^ノ僕^ノのうち謀^リダビデ^レとど
 く忠^義ある彼^ノ王^ノの婿^シとして親^シく汝^ヲに見^ルるも汝^ハ汝^ノ家^ニ尊^ビ
 まる者^ハにあらずやま我^レ其^ノ時^ニあれのためお神^ハ問^ヒことを始めし
 や去^レたからずぬがハ王^ハ僕^ハおよびわが父^ノの全家^ニに何をも歸^ス
 する者^ハ其^ノ僕^ノ此事^ニついてハ多少^ヲをいハす何をも去^レらさき
 バありま王^ハいひけるハアヒメレグ汝^ハ必ず死^スぬべし汝^ノの父^ハ全家^ヲ
 も去^レりて王^ハ傍^ニにたてる前^ノ驅^ノの人^々ハいひけるハ身をひるガ
 へしてエホバ^ノの祭司^ヲを殺^スせよ去^レらもダビデ^ハ力を合^スするガ故^マ
 たかきらダビデ^ハ逃^レたるを去^リて我^レに告^ガりし故^{アリ}と然^レと王^ハ
 の僕^手をいだしてエホバ^ノの祭司^ヲを撃^ツことを好^マされバ王^ハエ
 グにいふ汝^ノ身をひるガへして祭司^ヲをうち其^ノ日^ニ布^レエホバ^ヲを衣^タる者^ハ八十
 五人^ヲを去^レせり去^レられた刃^ヲを以^テ祭司^ノの邑^ノノブ^ヲを撃^ツち刃^ヲをも

て男女童稚嬰孩牛驢馬羊を殺せり。アヒトアハ子アヒメレタの一人の子アビヤタルどあづくる者逃きてダビデあはしり。またダムニアビヤタルサウルガエホバの祭司を殺したるみどをダビデあ告ふ。そのバミダビデアビヤタルにいふ。その日エドミ人ドエグ彼處をりし。バ我らとガ必らずサウルあつげん。みどを。知さ。り。我々の父の家の人々に生命を喪へる。源由とあれ。り。三。汝我どもに居れ。懼る。よ。ある。れ。わ。ガ。生命を求むる者。汝。れ。生命をも求むる。る。り。汝我どもあ。ら。バ。安全ある。べ。し。

人々ダビデアつげていひける。視よ。ベリシテ人ケイラを攻め。巖場を。搦。む。と。ダビデアホバに。問。て。い。ひ。ける。我。も。きて。是。の。ベリシテ人。を。導。つ。べ。き。り。と。エホバダビデアいひたまひける。往。て。ベリシテ人。を。うち。て。ケイラを。救。へ。ニ。ダビデアの。従。者。か。れ。い。ひ。ける。視。よ。わ。さ。ら。此。お。ユダにある。すら。尙。は。あ。る。現。や。

ケイラにゆきてベリシテ人の軍あわたるをや。と。ロダビゾふたよ。び。エホバに。問。ひ。ける。お。エホバ。答。て。い。ひ。たま。ひ。ける。起。て。ケイラ。わ。く。だ。れ。我。ベリシテ人。を。汝。の。手。あ。じ。た。す。べ。し。エホバ。ダビデア。ど。の。従。者。ケイラ。あ。ゆ。き。て。ベリシテ人。と。た。よ。う。ひ。彼。ら。の。家。畜。を。奪。ひ。とり。大。に。あ。さ。ら。を。う。ち。こ。ろ。せ。り。か。く。ダビゾケイラの。居民。を。す。く。ふ。ハ。アヒメレタの子アビヤタルケイラ。の。ガ。レ。て。ダビデア。い。た。れ。る。時。其。手。あ。エホバ。を。執。て。く。だ。れ。り。七。愛。お。ダビデア。の。ケイラ。い。た。れ。る。事。サ。ウ。ル。あ。聞。え。け。れ。を。サ。ウ。ル。い。ふ。神。か。れ。を。我。手。あ。わ。た。し。た。ま。へ。り。其。の。か。き。門。あ。り。開。ある。邑。に。い。り。た。れ。バ。閉。み。め。ら。る。れ。バ。あ。り。ハ。サ。ウ。ル。す。な。い。ち。民。を。あ。じ。と。し。く。軍。に。よ。び。あ。つ。め。て。ケイラ。あ。く。だ。り。て。ダビデア。其。従。者。を。圍。ん。ど。す。エ。ダビデア。之。サ。ウ。ル。の。あ。の。邑。を。害。せ。ん。と。謀。る。を。知。り。て。祭司アビヤタル。あ。い。ひ。ける。お。エホバ。を。持。ち。きた。れ。と。ま。う。し。て。ダビデア。い。ひ。ける。お。イスラエルの。神。エホバ。よ。

僕たしむふサウルがタイラおきたりてわがために此邑を得るば
 さんど求むるを聞きしタイラの人々我をかれの手おはしたすなら
 んる僕のきけることくサウル下るあらんやイスラエルの神エホ
 バよ請ふ僕につけたまへどエホバいひたまひけるに彼下るべし
 どまダビデいひたるにタイラの人々曰れどわが従者をサウルの
 手おわたすらんやエホバいひたまひけるに彼らわたすべし
 是においてダビデと其六百人をうりの従者起てタイラをいで其
 おきうる所にもけりダビデのタイラをにげはまじしむとサウル
 お聞きけむバサウルいづるふとを止たり言ダビデの曠野おをり
 要害の地おをりまたロフの野おある山お居るサウル恒おかれを
 尋ねたれども神のれを其手に見たしたまひざりきまダビデサウ
 ルがそのれの生命を求めんためお出たるを見る時おダビデのロ
 フの野の叢林にをりしがまサウルの子ロナタンたらて叢林にい

りてダビデにいたり神によりて其力を強うせしめたりと即ちヨ
 ナタンかきおひひけるに懼るまなりれわが父サウルの手汝にど
 くみどあらじ汝のイスラエルの王とあらん我の汝の次あるべ
 し此事のわが父サウルもまれりどまゝて彼ら二人エホバのま
 へお契約をむすびダビデの叢林おとまざりロナタン其家にか
 へれりま時おロフ人ギベアにのぼりサウルの許おいたりてい
 ひけるにダビデの曠野の南おあるハキラの山の叢林の中ある要
 害お隠きて我らとともにおをるおあらずや今王汝のくだらんと
 する望のことく下りたまへ我らにかれを王の手にわたさんど
 サウルいひけるに汝ら我をおはれめば願くは汝等エホバより福
 祉を文よ三請ふゆきて尙は心を用ひ彼の踪時ある處ど誰がかれ
 を見たるうを見きりめよ其人我おそれ甚だ機巧く事を爲す
 を告たれば也三言さば汝ら彼が隠るま逃躲處を皆たしうに見き

りめて再び我あきたき我汝らとどもにゆらん彼もし其地あ
 バ我ユダの郡中をあまねく尋ねて彼を獲んと言かれらたちてサ
 ウルも先てロフにゆけりダビデと其従者の曠野の南のアツバ
 あるマオンの野あをる三期てサウルと其従者ゆきて彼を尋ぬ人
 々みれをダビデに告げればダビデ巖を下てマオンの野あをるサ
 ウル之を聞てマオンの野あ至てダビデを追ふ言サウル山此
 旁に行ダビデと其従者は山の彼旁に行ダビデは周章てサウルは
 前を避んとしサウルと其従者のダビデと其従者を圍んで之を取
 んどす七時あ使者サウルも来て言けるハハリレテ人國ををりす
 急ぎきたりた才へど戻故あサウルダビデを追ことを止てかへり
 往てハリレテ人ああたることをもて人々ろのどみろをセラマレ
 コラ(逃岩)どあづく言ダビデ其處よりのぼりてエンゲデの要害あ
 をる

第廿四章

一 サウルハリレテ人を追ふみやめて還りし時人々
 々かれあつげていひけるハ視よダビデのエンゲデの野あありと
 ニサウルイストラエルは中より選きたる三千の人を率あゆきて野
 羊の巖あダビデと其従者を尋ぬニ途にて羊は獲あいたるあ其處
 に洞穴ありサウル其足を掩んとていりぬ時あダビデと其従者洞
 の隅あ居たりコダビデの従者みれあひひたるハエホバガ汝あ告
 て視よ我汝の敵を汝の手にわたし汝をして善と見るどころを彼
 にあさしめんといひたまひし日ハ今なりとダビデするはち起て
 ひろああサウルの衣の帯をさきりエダビデサウルは衣の帯をさ
 りしあよりて後ち其心みづから責むハダビデ其従者あひひける
 ハエホバは膏ろよたし者あるわが主にわが此事をなすをエホバ
 禁じたまふれハエホバの膏ろよたし者あればあれあ散してわ
 ぐ手をのぶるあ善らちエダビデ此ことををもつて其従者を止め

サウルに撃ち入りたる事を容さずサウルたちて洞を出て其道おもくハダヒテまた後よりたちて洞をいでサウルのうしろを呼りて我主王よといふサウル後をかへりたる時ダビデ地にふして拜せエダヒテサウルにいひたるに汝あんずダビデ汝を害せんことを求むといふ人の言を聴くや十視よ今日汝の目エホバの汝を洞のうちにて今日見ガ手あわたしたまひしことを見たり人々我あ汝をころさんふを勸めたれども我汝を惜めり我いひけらくわガ主エホバの膏うたしし者なれば吾に敵してわガ手をおへるちすどさわガ父よ視よわガ手にある汝の衣の帯を見よわガ汝れ衣の帯をきりて汝を殺さるを見をわガ手に惡も罪過もなきふどを汝見て知るべし我汝ふ罪ををせしむとるし然るに汝わガ生命をどらんとねらふエホバ我と汝の間を審きたまはんエホバはガため汝に報いたまふべし然と見ガ手の汝お加

へざるべし古への跡にいふごとく惡の惡人よりいづされど是ガ手の汝わくのへざるべし昔イスラエルの王の誰を起んとて出たるや汝たれを起ふや死たる犬をおひ一の蚤をおふありまねがはくのエホバ審判者となりて我を汝のあひだをささむつ見てわガ詛を理し我を汝の手よりすくひいだしたまはんことを其ダビデみれらの言をサウルに語りをへしどきサウルいひけるにわガ子ダビデよ是の汝は聲あるうどサウル聲をあて哭きぬ志去りしてダビデにいひたるに汝の我よりも正し我の汝に惡をむくゆるに汝の我に善をむくゆえ汝今日いづくに汝ガ我あ善くあるを明らめせりエホバ我を爾の手にわたしたまひし爾我をころさよりしあり人もし其敵にあはとて色を穿らうに去しむべらんや爾ガ今日我あふしたる事のためエホバ爾あ善をむくいたまふべし十視よ我爾が必ず王とあらんことを知りまたイスラエ

ルの王國の爾の手およりて堅くたよんみどをしる。今爾エホバ
 をさして我にわが後にてわが子孫を断すわが名をわが父の家お
 滅せざらんみどを誓へど。ミダビダするはちサウルふちりよ。是お
 ちひてサウルの家にちへりダビダと其從者の要害にのぼれり。
 第一五節 爰にサムエル死しけむ。イスラエル人皆あつたりて
 之をりあしミラマおあるろの家にてこれを葬ひ色りダビダち
 てパランの野おくだるニマオンお一箇れ人あり其所有のカルメ
 ルあり其人甚だ大いある者おして三千の羊と一千の山羊をも
 ちしダカルメルにて羊の毛を剪り居たり。其人の名ナバルと
 いひ其妻の名ハビガルといふ。ハビガルの賢く顔美き婦なり。さ
 れど其夫ハ剛愎にして其爲をどふる惡りきうれハカレブの人
 あり。ダビダ野おありてナバルが其羊れ毛を剪りをるを聞きエ
 ダビダ十人の少者を遣はす。ダビダ其少者おいひけるハカルメル

ふのぼりナバルおいたりわが名をもておれお安否をどひたらく
 のをどくいへ聞くハ毒あぐれ爾平安おれ爾の家やすらうおれ
 爾が有どみろの物とあやそらうおれ。我爾が羊毛を剪せをるを
 聞き爾の牧羊者ハ我らとともおありしダ我らこれを害せざりき
 またおれらダカルメルおありしおひだりれらの物何も失たるお
 どなし。ハ爾の少者に問へり。爾につげん。聞くハ少者をして爾
 のまへに思をぬせしめよ。我ら吉日お來る請ふ爾の手にあるとあ
 ろの物を爾の僕られよ。ハ爾の子ダビダにあたへよ。ハダビダの少
 者おいたりダビダの名をもつて。是らのことおの如くナバルお語り
 てやめり。ハナバルダビダの僕にこたへていひけるハ。ダビダの
 するエサイの子ハ爾ある此頃ハ主人をすてよ。通逃るよ。僕れ得し
 我おにわがバンド水れよ。ハわが羊毛をきる者のためお殺した
 る肉をとりて何處よりう知さきるところの人ハにあたふべけん

やまダビアの少者ふりうへりて其道に就き歸りきたりて此等の言のこどくダビアに告ぐは是をわいてダビア其從者に爾られの劍を帶よと言けれは各劍をおふダビアもまた劍をおふ而して四百人ありダビアにまたがひて上り二百人は輻重のどころに止れり當時にひまりの少者ナバルの妻アヒガルあつげていはるの視よダビア野より使者をわくりて我らの主人を祝したるに主人かれらを看れりまされとかは人々のわれらお甚だ善くもし我らの害をらうむらずまたわれら野ありし時われらどどもにをるあひだりあをも失ふのぎりきま我らが羊をかひて彼らどどもありまあひだ彼らの日夜われらの穢とるれりまされば爾今まりてなをなさんるを考ふべし其われらの主人にまた主人の全家お定めて害きたるべたればあり主人の邪魔ある者あして語ることを文すとまアヒガルいうは二百酒の革囊二飯

お調へたる羊五疋麥五セア葡萄酒百瓩乾無花果園園塊二百を取て驢馬おせせま其少者にいひけるはわが先お進め祝よ我爾らの後おゆくど然と其夫ナバルに告げざりきアヒガル驢馬ありて山の僻處おくだれる時祝よダビアと其從者かれにむるひてくだりけきむりれ其人々にあふニダビアつていひけるは誠おわき徒に此人は野おて有る物をみるまもりてその物をして何もうせざらしめたりうれの悪をもてわが善あむく時三ぬがくの神ダビアの敵あるくあした重ねておくあしたまへ明晨までに我のナバルお属する總ての物の中ひどりの男をものこさるべしアヒガルダビアを祝しとき急ぎ驢馬よりたりダビアのまへお地に俯して拜し其足もどおふしていひけるはわが主よ此答を我お歸したまへ但し婢をまて爾の耳あいふことを得さしめ婢のこど心を聽たまへ三ぬがくのわが主この邪ある人ナバル(愚

の事を意に介まじへてかかれ其そのけりきり其名のととくあれをありあれ
 の名のナバルにしてるきり愚おろかりとれあんちの嫡あまのわが主まのつ
 るはせし少ものを見みりきりささきとわが主もよエホバはいくま
 たあんちのたましひはいくエホバなんちのきたりて血ちをふるま
 また爾なんぢがミづりち仇たがひをひくゆるを阻とどめたまへりねがゆく雨あめの
 敵てたるものれよびわが主しゅに害がいをくへんとする者もののナバルは
 どくあれよさて仕つか女むすめがわが主まにもちきたりしこれ禮物たまをねが
 くるは主しゅの足あし迹あとにあゆむ少者にたてまつらめれたまへん請こふ
 嫡あまの過とがをゆるしたまへエホバ必かなららずわが主しゅのため堅こ家たけを立た
 たまひん是こはわが主しゅエホバの軍いふふより又世またにいでもより
 このゝた爾なんぢの身みお悪わるきと見えざるによりてあり人たちて爾なんぢを
 追おひ爾なんぢの生命いのちを求いむまどもわが主しゅの生命いのちの神かみエホバどども
 に生命いのちの包裹つつみの中に包つつみあり爾なんぢの敵たがひは生命いのちの投い石器いのうちより

投なすつることくエホバこれをあげすてたまひんすエホバは爾なんぢ
 あつきて語かたりたまひし諸もろれ善よき事をわが主しゅにあして爾なんぢをイスラ
 エルれ主しゅに命いのちじたまひん時ときあいたりて三みつ爾なんぢれ故ゆかくして血ちを
 ふるしたるまども又わが主しゅれミづりち其仇たがひをひくいし事も爾なんぢれ
 要もととあることかくまたわが主しゅれ心こゝろの責せきとあることなるべし但ただ
 太たエホバのわが主しゅお善よくあしたまふ時にいたらばねがゆくは始はじ
 を憶おもたまへ三みつダビデアだびだピガニにいふ今日こんにち汝なんぢをつりはして我われをむ
 うへしめたまふイスラエルの神かみエホバは願ねが美うつくべきうあまた汝なんぢ
 の智恵ちゑはほむべきりな又汝なんぢの得えむべきかか汝なんぢ今日こんにちわがきたりて
 血ちをなぐし自ら仇たがひをひくゆるを止めたり言ことわが汝なんぢを害がいせるを阻
 めたまひしイスラエルの神かみエホバは生いく誠まこととあるし汝なんぢいうさ
 て我われを來きり迎むかすバ必かならず聖朝せいしやうまでにはナバルの所ところにひとり男おとこもの
 こらざりしあんちと三みつダビデアだびだピガニ携たづなへきたりし物ものを其手そのて

より受てられたにいひけるは安ろに汝の家かへりればさ観よわ
 れ汝は言をきよいて汝の顔を立たり去りてアヒガルナバル
 おいたりて成にうれの家お酒宴を設け居たり王の酒宴はことし
 ナバルは心こきがために樂みて甚だしく酔たれバアヒガル多少
 をいえず何を聖朝まであるおつけざりき朝おいたりナバル
 の酒はさめたる時妻おれお是等の事をつけたるお彼の心うのう
 ちに死て其身石のことくありぬ十日バありありてエホバナバ
 ルを撃ちたまひけれを死りエホバナバルの死たるを聞いていひ
 けるエホバは頌美べきあるエホバわが業むりたる恥辱の訟を理
 してナバルおむくい僕を阻めて悪をおこるひさらしめたまふ其
 のエホバナバルの悪を其首に歸し賜へバなりと愛おダヒデアヒ
 ガルを妻おめどらんとて人を遣ひしてふれどらたらひしむ早ダ
 ビアの僕おカルおをるアヒガルの許にいたりてふさおたり

いひけるのダヒデア汝を妻おめどらんとて我ちを汝お遣ひすと
 アヒガルたちて地おふして拜しいひけるの祝よ嫡の旦那の僕
 等の足をあらふ仕女ありとアヒガルいろぎたちて驢馬お乗り
 五人の侍女とともおダヒデアの使者おしたまひゆきてダヒデアの妻
 とあるエホバデアまたエズレルのアヒノアムを娶れりおれら二人
 おビアの妻となる目但しサウルのおダヒデアの妻ありし其おカ
 ルをガリムは人あるライシバ子ナルおあたへたり
 けるのダヒデアの曠野のまへあるハキラの山おかくれをるおあ
 らすやどニサウルするのち起ちソフの野おダヒデアを尋ねんとイス
 ラエルの中より選みたる三千の人を去たがへてソフの野おくだ
 るニサウルの曠野のまへあるハキラの山おあいて路の傍どりお
 陣を取るダヒデアの曠野お居てサウルのおのきをおふて曠野おき

たるをさとりければ、コダビデ斥候を出して、サウルの陣をお來しを
 志せり。是より、おれいて、ダビデたちて、サウルの陣をどれるとて、
 おいたり、サウル、ねよび、其軍の長キルの子、アブテルの寝たるどて
 ろを見たり、そありち、サウルの車營の中、お寝ぬ民、其まわり、お陣を
 とせり。ユダビデ、答へて、ヘラ人、アヒメレダ、ねよび、セルヤの子、お志
 て、コアブの兄弟、ある、アビシヤ、おいひ、りるは、誰か、我どもに、サ
 ウル、陣、おく、だら、ん、く、ど、アビシヤ、いふ、我、汝、ども、お下らん、
 ヌ、ダビデ、アビシヤ、いす、あり、ち、夜、おいりて、民の所、おいたる、お視、よ
 サウル、の、車營、のうち、お寝臥し、其、槍、地、おさして、枕邊、おあり、アブテ
 ル、と、民、と、其、ま、はり、お寝、たり、ヌ、アビシヤ、ダビデ、おいひける、の、神
 今日、爾、敵、を、爾、の、手、に、わたした、ま、ふ、請、ふ、い、ま、我、お、槍、を、もて、り、れ
 を、一度、地、おさし、と、得、さし、め、再、び、する、に、れ、よ、を、ヒ、ユ、ダビデ、ア、ビ
 シヤ、い、に、い、ふ、彼、を、お、ろ、す、な、り、れ、誰、り、エ、ホ、バ、は、膏、ろ、よ、さし、者、お、敵、

して、其、手、を、の、へて、罪、お、り、ら、ん、や、ユ、ダビデ、また、い、ひ、ける、の、エ、ホ、バ
 は、生、く、エ、ホ、バ、の、れ、を、撃、た、ま、い、ん、ある、ひ、の、死、ぬ、る、日、來、ら、ん
 ある、ひ、の、戰、ひ、お、く、だ、りて、死、う、せ、ん、と、わ、ガ、エ、ホ、バ、の、あ、ふ、ら、う、ま
 ぎ、し、も、の、お、敵、し、て、手、を、の、ぶ、る、み、と、の、き、め、て、善、ろ、す、エ、ホ、バ、禁、じ
 た、ま、ふ、され、とい、ま、請、ふ、爾、の、ま、く、ら、も、ど、の、槍、と、水、は、瓶、を、ど、れ、し
 か、し、て、我、ら、さ、り、も、か、ん、と、ユ、ダビデ、サウル、の、枕邊、より、槍、と、水、の
 瓶、を、取、りて、り、れ、ら、さ、り、ゆ、き、し、ガ、誰、も、見、ず、誰、も、お、ち、す、誰、も、目、を、醒
 さ、し、り、き、其、の、り、れ、ら、皆、眠、り、居、た、れ、バ、あり、即、ち、エ、ホ、バ、り、れ、ち、を、ふ
 ろ、く、睡、ら、し、め、た、ま、ふ、ま、お、く、て、ダビデ、之、彼、旁、に、お、たりて、遙、お、山、の
 頂、に、た、て、り、彼、と、此、と、の、へ、だ、り、大、い、あり、言、ダビデ、民、と、テ、ル、の、子
 アブテル、に、よ、ま、り、い、ひ、ける、の、アブテル、よ、爾、み、た、へ、さ、る、り、アブ
 テ、ル、こ、た、へ、て、い、ふ、王、を、よ、お、附、り、た、れ、ある、や、ユ、ダビデ、アブテル、に
 い、ひ、ける、の、爾、の、勇、士、あ、ら、ず、や、イ、ス、ラ、エ、ル、の、中、お、て、誰、お、爾、に、如、も

のあらんあたるお爾あんず爾の主なる王をまもらざるや民のひ
 どり爾の主ある王を殺さんどていりぬま爾がみせる此事よあら
 ずエホバの生くなんぢらの罪死にあたれり爾らエホバの膏よ
 きし爾らの主をまもらざればをみり今王の槍と王の杖邊ありま
 水の瓶にいづくああるかを見よまサウルダビデの聲をきりてい
 ひけるわが子ダビデよ是の爾の聲あるかダビデいひけるわ王
 足が主よ足が聲ありまダビデまたいひけるわ足が主なあゆふ
 斯くろの僕をれふや我あをみせしや何の悪き事わが手ああ
 るやま王わが主よ請ふいま僕れ言を聴きたまへ若しエホバ爾を
 我お敵せしめたまふならバねダのくわエホバ禮物をうけたまへ
 されど若し人ならバねダのくわ其人々エホバのまへのろりま
 よ其の彼等爾のきて他の神に切りへよといひて今日我を追ひエ
 ホバの産業お連あるふとをえさらまむるが故ありまねダのくわ

わが血をしてエホバのまへをはるれて地にれちしむるなくれろ
 の人の山おて鳴槍をれまごまごくイストラエルの王一は蚤をたづ
 ねにいでたればありまサウルのいひけるわ我罪ををるせりわが子
 ダビデよ歸まわが生命今日爾れ目に實と見みされたる故あより
 我あさねて爾に害を加へざるべし嗚呼わも愚あることをなして
 甚だしく過てりまダビデたへていひけるわ王よ槍を視よ請ふ
 ひどりの少者をして見たりてこれを取あめよまねダのくわエホ
 バののに其義と眞實と志たダひて報いたまへ其のエホバ今
 日爾をわが手にわたしたまひしに我エホバの受膏者に敵してわ
 が手をのぶることをせされバありま爾れ生命を今日足がれもん
 せしごまごくねダのくわはエホバわが生命をれもんして諸の難の
 うちより我をすくいひだしたまへまサウルダビデいひけるわ
 わが子ダビデよ爾の得むべきか爾大ある事を爲さん亦かあら

歩勝をえんと去りしてダビデと其道にさりサウルわれの所の
 にうへれり
 一ダビデ心の中こころにいひけるは是のごとくバ我早晚サ
 ウルは手に得るびん速にベリシテ人の地にのがるよにまざるこ
 とあら歩然らバサウルがさねて我をイストラエルの四方は境に
 たづぬるふどをやめて我うれし手をのぐれんどダビデたちて
 あれきどもある六百人のものどもにわたりてガラの王マオ
 クの子アキシにいたるニダビデと其從者ガクにてアキシども
 お住てれのく其家族どもにをるダビデのろの二人の妻すあ
 りちエズレル人アヒノアムとカルメル人ナバルは妻ありしアピ
 ガルどもにありロダビデのガクにあふしとサウルあきみ受け
 れをサウルあきみねてかれをたづねざりきニこよにダビデアキシ
 にいひけるは我もし爾のまへお思を得たるあらバねがひくは郷

里ある邑のうちあて一のどころを我あたへて其處あすむこ
 どを得さしめよ僕あん予爾どもも王城おをむべけんやとカア
 キシ其日チクラグをくれあたへたり是故にチクラグの今日に
 いたるまでユダの王お属すダビデのベリシテ人の國あをり志
 日敵の一年と四箇月ありきハダビデ其從者と共あはばりケレユ
 ル人ケセリ人アムレク人を襲ふたり昔よりは等ハシユルおいた
 る地あすきてエシブトの地あまでおよべりハダビデ其地をうち
 て男をも女をも生し存さす羊と牛と駱駝と衣服をとりて還りて
 アキシお至るハアキシにいひけるは爾ら今日何地を獲ひ志やダビ
 デにいひけるはユダの南とエラメルの南とケニ人の南ををらせり
 とダビデ男も女も生存らめめすして一人をもガクおひきゆあ
 ざりき其ハダビデ恐くはなれらダビデアうくなせりといひて我等
 の事を告んといひたきバありダビデアベリシテ人の地あすめるあ

ひだり共あるところ常にうくのごとくなりきまアキレダビアを
信じていひけるに彼の民イスラエルをして全くたれきを惡ま
しむされバ永くわが僕とあるべし

第二十三節

其頃ベリシテ人イスラエルと戦いんとて軍のため

軍勢を集めたまバアキレダビアにいひたるに爾明らあてきを去

き爾と爾の従者我どもも出で軍あくるべしニダビアアキ

レにいひけるにされバ爾僕のあさんどころを去るべしとアキレ

ダビアあさらバ我爾を永くわが身をまもる者とあさんといへり

ニサムエルそでお死たれバイスラエルとこれをあらしみてあ

れをろのまらラマあはうむれりまたサウルの口寄者ト下筆師を

其地よりたひいだせりトベリシテ人あつまりきたりてトユサム

エルをどりけきバサウルイスラエルを恐くあつめてギルボアあ

陣をどきりニサウルベリシテ人の軍を見しとさあうれて其心大

いふふるへたりニサウルニホバあ問ひけるにホバ對たまひす

夢ふよりてもウリムふよりても預言者ふよりてもたへたまは

すニサウル僕等あひひけるに口寄の婦を求めよわれろのどころ

あゆきてこれお尋ねんと僕等あれあひひけるに祇よエンリルあ

口寄の婦ありニサウル形を變へて他の衣服を着二人の人をども

あひてゆき彼等夜の間に其婦の所あいたるサウルいひけるに請

ふむダためお口寄の術をあてなひてわが爾お言ふ人を足れに呼

おこせニ婦あきあひひけるにあんちサウルはなしたる事すなは

ち如何あられが口寄者ト下筆師を國より斷さりたるを知る爾あ

んち我を死なめんとてわが生命を亡す請罰をあすやニサウルニ

ホバを指てりきお誓ひいひけるにホバは生く此事のためある

んち罪にあふむとわらじと婦いひけるに爾を我なんちあ呼起を

べきりサウルいふサムエルをよびあてせと婦サムエルを見て大

なる聲にてさけびいだせり去りて婦サウルありて見ゆるに爾も
 亦我を欺きしや爾を尋ねて婦サウルにいひけるに我神
 けるに恐るゝなりき爾をに見しや婦サウルにいひけるに我神
 の地よりの帯るを見たり言サウルはれにいひけるに其形容の如
 何彼にいひけるに一人の老翁のぼる其人明衣を衣たりサウル其人
 はサムエルなるをまりて地をふして拜せりサムエルサウルは
 いひけるに爾あんず我をよびあひして我をわづらひずやサウル
 みたへけるに我いたく懼むベリレテ人我をむらひて軍をおこし
 又神我をはるきて預言者およりても交夢によりてもふたよ次我
 ふみたへたまはずのゆゑお我をそべき事を爾にまゑんどもて
 爾を呼りてサムエルにいひけるにエホバ爾をはるれて爾の敵とあ
 りたまふに爾あんず我おとふやとエホバわれをもて語りたまひ
 しみどをみづら行てエホバ國を爾の手より割きはなら爾は隣

入ダヒアにあたへたまふに爾エホバの言をまたぐらず其烈しき
 怒をアマレクにもらさざりしおよりてエホバ此事を今日爾ある
 したまふにエホバイスラエルをも爾とともおベリレテ人は手あ
 わたしたまふべし明日爾と爾れ子等我とともなるべしまたイス
 ラエルの陣營をもエホバベリレテ人の手に足したまはんと
 サウル直ちお地に伸びたまふにサムエルは言のためお痛くおそれ
 又其方を失へり其のれ其一日一夜物食さりければありとこれ
 婦サウルおいたり其痛く慄くを見てみれにいひけるに祇よ仕女
 爾の言をきまわが生命をかけて爾が我にいひし言にまたぐへり
 言されば請ふ爾も仕女の言を聴て我をして一口のパンを爾のま
 へにらゝへしめよ去りて爾くらひて途に就く時に力を得よ三
 されどサウル否みて我の食のじといひしを其僕および婦強けれ
 ば其言をきよいとて地よりたちわがり床のうへに坐せり婦の

家も肥たる積ありしをバ急たて之を殺しまた粉をとり搗て爵い
れぬパンを炊きミヤウルのまへに其僕等のまへに持ちきたりけ
るを彼等くらひて立ちあがり其夜のうちあふされり

第二十四節

一爰にベリレテ人其軍をみどくアベクあつむ

イスラエルのエズレルある泉水の傍に陣をどるニベリレテ人
の君等あるひの百人或の千人をひきゐて進ミダビデと其從者

アキレととも其後あそむニベリレテ人は諸伯いひけるは是

等ハベブル人の何あるやアキレベリレテ人の諸伯いひけるは

此のイスラエルの王ヤウルの僕ダビデあらずやうき此日ごろ

此年ごろ我どもあをりしダラの逃げおちし日より今日にいた

るまで我りれの身か答あるを見ずとロベリレテ人の諸伯を

怒る即ちベリレテ人の諸伯彼いひたるは此人をうへらしめて

爾が之をおさし其所にふたたびいたらしめよ彼れ我らとともあ

戦ひあくだるべからず然を彼戦争あねいてわれらの敵とあらき
るべしよき其主と和ダんとせバ何をもてすべきやゐの人々の首
級をもてすべきにあらずやエ是のうつて人々ダ舞踏の中あて歌
ひあひヤウルの千をうちふるしダビデの萬をうちふるをといひ
たるダビデにあらずやアキレダビデをよびてこれいひける
ハエホバの生くまことになんちの正し爾は我どもに陣營あ出
入するの目目目善と見ゆ其の爾ダ我に來りし日より今日あ
いたるまで我爾の身か悪き事あるを見されバあり然と諸伯の目
に之爾よからずせされバ今あへりて安かあゆみベリレテ人の諸
伯の目あ悪く見ゆることをあすあかきダビデアキレいひた
るハ我何をあせしやわダ爾のまへに出し日より今日まで爾何
を僕の身に見たきむろ我ゆきて是ダ主あるわらの敵とたよりふ
みとを文さるどニアキレあたへてダビデいひけるは我爾のわ

目には神は使のむとく善きをあるされどペリシタ人の諸伯も
 色の我らどもも不戦ひにのぼるべからずといへり+さきバ剛
 よび爾の主の僕の附とどもふきたれる者明朝夙く起よ爾ら朝之
 やくたきて夜のあくるに及むとさるべし+是をもてダビデと其
 從者ペリシタ人の地あるへらんと朝はやく起てされり^あして
 ペリシタ人のエズレルにのぼれり

第三十章

三日にダビデと其從者第三日にチクラグをいたるにアマレ
 ク人すてふ南の地とチクラグを侵したり^あれらチクラグを撃ち
 火をもて之を燬き+其中お居りし婦女を擄ふし老たるをも若き
 をも一人も懸さずして之をひきて其途おれもむけり+ダビデと
 其從者巴にいたりて疲あ巴の火お燬けるの妻と男子女子の擄に
 せられたり+ダビデねよびこれとどもある民聲をあげて哭き
 終に哭く方もあき^あにいたれり+ダビデのふたりの妻するはちエ

ズレル人アヒノアムとカルメル人ナバルの妻なりシアピガルも
 擄あせられたり+時あダビデ大いお心を苦めたり其の民はこれ
 の其男子女子れたためお氣をいらだてダビデを石おて撃んといひ
 たればなりされどダビデ其神エホバによりておのきをえげ+せ
 り+ダビデアヒメレクの子祭司アピヤタルおひけるに請ふエ
 ホアを我あもちきたきとアピヤタルエホアをダビデにもちきた
 る+ダビデエホバに問ていひけるに我此軍の後を追ふべきや我
 これに追つくみどをえんかどエホバおきおこたへたまはく追ふ
 べし爾らならず追つきてたしおに取もどすことをえん+ダビデ
 ねよびこれとどもある六百人の者ゆきてベツル川おいたれり後
 におみれる者のこまにどとさる+即ちダビデ四百人をひきぬて
 追ゆきし+ダビデおきてベツル川をくだるこどわたえざる者二百人の
 どとまれり+衆人野あて一人はエロブト人を見みれをダビデお

ひきよたりてみれに食物をあたへけれバ食へりまたこそ水をも
 のませたりますすなはち一段は乾無花果と二種の乾葡萄をみれに
 あたへたり彼くらひて其氣ふたよび爽るおるれりは三日三
 夜物をもくハサ水をものまきりしありダビデハいひける
 ハ爾の誰の人ある爾にいづくの者あるやられいひけるは我ハ
 ハソトの少者ふて一人のアマレク人の僕なり三日まへハ我疾お
 ろよりしゆゑふわガ主人我をすてたり昔我ラケレテ人の前とユ
 ダの地とカレブの南ををりしまた火をもてチクラグをやけりま
 ダビデられいひけるハ爾我を此軍にもちびきくだるやられい
 ひなるは爾我をころさすまた我をわガ主人の手にいたさるを
 神をさして我お招へ我爾を此軍おみちびきくだらん其ラダビ
 デをみちびきくだりしが視よ彼等はヘリセラ人の地とユダの地
 より奪ひたる諸の大いなる掠取物のためによろこびて飲食し仰

りつゝ地おまねく散りひろがりて居るダビデ暮あひより次
 日の曉いたるまでかさを撃しウバ駱駝おのりて逃げたる四
 百人ハ少者の外ハ一人ものダレたるもの无りき大ダビデハすべ
 てアマレク人の奪ひたる物を取りもとせり其二人ハ妻もダビデ
 どりもとせりまも小きも大あるも男子も女子も掠取物もすべてア
 マレク人の奪さりし物の一も失はずダビデみどく取るへせ
 りダビデまた凡の羊と牛をとれり人々この家畜をろのまへお
 驅きたり是ハダビデハ掠取物ありといへり三ウくてダビデハ
 懲きてダビデハまたダヒ得ずしてベツレ川のほとりに止まりま
 二百人の者のどみろいたるお彼らダビデをいでむウへまたダ
 ビデどもなる民をいでむふダビデの民おちかづきてろの
 安否をたづぬミダビデどもおゆきし人々の中の悪く邪ある者
 まなみたへていひけるハ彼等の我らどもにゆききりけきバ我

らみれ取りもどしたる掠取物をわけわたすべからず唯わたの
 のふろの妻子をあたへてこれをみちびきさらしめんダビダ言
 けるハバガ兄弟よエホバ我らにせめきたりし軍を
 我らの手にわたしたまひたれバ爾らエホバはわれらふたまひし
 物をまかせるは宜ららず爾らありよるふどをゆるさんや
 戦ひゆくだりし者の取る分のごとく輻重のかたはらふ止まりし
 者の取る分もまた然あるべし共にひどしく取るべし此の日に
 りれちダビダこれをイストラエルは法どみし例どみせり其事今日
 にいたる云ダビダチクタクおいたりて其掠取物をエダの長老な
 る其朋友おわうちなくりて曰しめける是はエホバの敵よりと
 りて爾らにたくる食物ありエベラルホをるもの前はラモテホを
 るものヤツタルにをる者エアラエルにをる者セフモテホをるも
 のエシラモにをるものエラカルホをるものエラメル人の邑ホを

るものケニ人け邑ホをるものエホルマにをるものコラセヤンホ
 をるものアタクホをるものヘブロンホをるものホよびすべて
 ダビダダ其従者どもも毎にゆきし所ホこ邑をわうちなくれり
 一ベリシテ人イストラエルと戦ふイストラエルの人々ベ
 リレテ人の空へより逃げ負傷者キルホア山に斃れたりニベリレ
 テ人サウルと其子等ホ攻よりベリシテ人サウルの子コナタンア
 ビナダブおよびマルキモニアを殺したりニ戦はげしくサウルに
 せまりて射手の者サウルを射どめけれバ彼痛く射手の者のため
 ホ苦しめりロサウル武器を執る者おひひけるハ爾の劍を抜き其
 をもて我を刺どはせ恐らくハ是等の割體あき者きたりて我を刺
 し我をはづうしめん然ども武器をどるもの痛くおられて肯せ
 されバサウル劍をどりて其上に伏したりニ武器を執るもサウ
 ルの死たるを見ておのれも劍の上ホふしてかれどもホ死りハ

かくサウルと其三人の子およびサウルの武器をどるもの並に其
 従者みる此日俱に死りてイスラエルの人々は谷の對向にをるも
 の及びヨルダンの對面ををるもはイスラエルの人々は逃るを見
 サウルと其子等の死るをきて諸色を棄て逃けれバベリテ人き
 たりて其中ををるも明日ベリテ人戦没せる者を刺んとてきた
 りサウルと其三人の子のギルボア山にたふきををを見たりと彼
 等そあつちサウルの首を斬り其鎧甲をはぎどりベリテ人の地
 の四方あつちりして此好報を其偶像の家および民の中につげし
 ひまたたかれら其鎧甲をアレタロタの家におき其體をベテレヤ
 ンの城垣に釘けたりとヤベレギレアアの人々ベリテ人のサウ
 ルにみしたる事を聞きしりむ勇士みあこり終夜ゆきてサウ
 ルの體と其子等の體をベテレヤンに城垣よりどりおろしヤベレ
 ふいたりて之を其處に焚き其骨をどりてヤベレの柳樹の下に

はうむり七日のあひだ斷食せり

95-91127

DEC 20 1947

